やつてをるといふ始末で、他から珈琲飲みや酒飲みに來るものもある。丸で、一つの城廓のやうな心持ちで、すこし上等室にでも入り込んで居ると、隨分氣前はよくなる。倫敦巴里伯林などの眞中で、大旅館と指さゝれてをるは、東京の官省などより遙に大きい。茶代といふことは入らぬけれども、酒手を要することは、實に夥しいもので、錢で无れば、給仕人でも荷持でも、石地藏のやうで、ちつとも動かぬ。茶一杯もつて來た奴にも、錢をやらねば顏つきがわるし、履みがいてくれた男にも、錢を與へねば、一切命令はきかぬ。昇降機の番人、食堂の給仕、湯屋の三助、一々度ごとに小錢を惠まねばならぬ習慣である。その代りに錢さへ與へておけば、どんな事でもする。殆ど水にでも火にでも入る、その働きといつたら實に夥しい。だから、それはうるさいが、又調法な場合もある。紳士の稅

ごおもつてをれば致方は无い。蒲團は毎夜その上敷から、枕切から悉皆取かへるから眞白で甚心持がいゝ。便器(これは必ず寢室においてある)も、朝ごとに奇麗に洗ふ。掃除も鄭重にする。そんな事の心もちのいゝのは、實に王公の位にでも上つたやうだ。

右いつたのは、まづ紳士のごまる宿屋であるが。下宿屋兼帶の安宿は、隨分むさくるしいのが多い。掃除も十分に行屆かず、夜具なども濕めつぽくて、床虫などは大方居るものと思はねばならぬ。是等もその極めかたは、右と同じやうで、食事なしの室がりのみと、さうでないものとあるが、こんな處の食事などは、とても快よく食はれたものでない。ここにその天から一階の住居などゝ來たら、寢ながら玻璃ごしに星が見えるやうな始末で、室の工合も三角な

處も、二角な處もある。丸で鼠の穴か、いたちの巣のやうな處もあるので、貧書生などは、大躰さういふ處を城廓とかまへて、空の星をかぞへてをる。素より敷物も无ければ、昇降機なども无い。日本の留學生なども、どうかすると、かゝる生活をやらねばならぬ事もある。決して西洋といつて、一から十まで、立派な處ばかりは无い。又金持ばかりは居らぬ。

さういふ小さな宿では、素より一室の中に寢臺が横たはり、その傍に机と椅子、さては道具入れ、着物入れ、盥漱器、便器、いはゞ勸工場の雛形のやうに、何もかも打こみで、十分に足も伸ばされない。水といつても、朝から給仕人が汲んで來たもので、終日こらへてをられねばならぬから、贅澤にはつかへない。窓などは僅に一つで、それも天井の工合で、三角形になつてをるのもある。こんなことをおもふと、まだ神田や本郷邊の書生下宿の方が、まさつてをるので、隨分西洋の學生も苦學する人が多い。甚しきは隣りは地獄屋で、下は曖昧室といふやうな處もあるが、幸にかの壁が嚴重で、例の鍵が无れば入られぬといふわけだから、非常に妨害にならぬのである。併しさすがに公共道德は守られてをつて、決して他をさわがしたり、又夜おそくかへつて、履の音たかく、廊下を通行したりはせぬ。醉ばらひの亂暴ものでも、夜の十二時過は、廊下を歩くには、虫の息で、履を爪立てゝやつてをるのは、頗る感心すべき習慣である。

土耳古の風俗

土耳古は、即ちオットマン帝國で、亞細亞歐羅巴の兩洲に跨つて居るが、此には歐羅巴土耳古の首府であるコンスタンチノープルの

風俗のあらましを書うとおもふ。一体この國は、バルカン半島の一部で、バルカン半島とは、歐羅巴の南部に突き出て居る島の、最も東にあるものである。

この半島は昔羅馬帝國の盛んな時分は、その一部であつたが、その後は土耳古人の手に歸して、十六七世紀の頃は、殆どそれが掌中のものとなつてをつた。

榮枯盛衰は世の習ひか知らぬが、一時は半島の大王のやうであつた土耳古も、段々とその勢力がおとろへて、統一の政を施く權力もなく、遂に七つばかりに分れてをるのが現今のありさまである。

即ち、土耳古。セルヴィア。モンテネグロー。ルーマニア。ブルガリア。希臘。ボスニア及びヘルゼゴウィナ二洲（これは澳太利に屬してをる。）というやうになつてをる。併しその中では矢

張土耳古が大國で、面積も一萬一千方里ばかり、人口も六百萬餘ある。

コンスタンチノープルは、即ちこのオットマン帝國の首府で、ボスフォラスの海峽に臨み、亞細亞のスクーダリーと相對して、黑海の口を扼し、風景のよいことは、歐羅巴の都府中でも、屈指の處である。

市の北には金角港の灣が深く入りこんで、蒸汽船や軍艦も碇船し、數多の商船漁舟も聯り、水清く山遠く、千鳥のむらがり囀づるなど何ともいへぬけしき。

昔はそんなに盛であり、今でもこんないゝ位置を占めて居る土耳古は、不幸にも財政の困難や、政治の偏頗や、宗教の固執などからして、各國の間に、すこしも勢力なく、一口に土耳古亡國などいふ聲さへ、全世界に聞ゆるやうである。いくらか亞細亞人の血が交つて

居る人種が、かくの如くおとろへてをるのは、まことに我々は氣の毒なものとおもふ。

此國では帝王の事をシユルタンといふが、今の帝はアブヅル、ハミツド第二世である。帝はこの國の政治の全權を握つて居らるゝ上に、回々教の大教長であるから、その權力は實に無限で、官吏軍人はいふまでもなく、一般の人民が、帝王に對しては、恰も神に對するがごとく、非常の信仰を以て、勅命ならば火でも水に成さんといふ勢ひである。これは決して政治上の意味のみでない、宗教上から來てをることで、戰でも何でも神の爲め、即ち君の爲めといふ決心の堅固な事は、巖石のやうである。財政はみだれ、政治も行屆かぬのに、矢張帝國として、その躰面を保つてをるのは、各國の權衡上でもあらうが、一はこの信仰の念が凝り固つて氷山の如くなつてを

るからであらう。

こんなわけだから、その人心のみは、サアーといふ場合には、決して動くまいが、一体には衣食住が、總てなまけて、見つともないこと夥しい。まづ家といつたら、帝王の宮殿や、宗教上の建物や、官衙や、兵營のやうなものは西歐羅巴に負けぬほど立派なものもあるが、全体に通じて、國民が住んでをる家は、壁やぶれ軒傾き瓦毀れて、まるで、老人の杖にすがつて立つてるやうなものだ。巴里や伯林の堂々たる建物を見た目からすると、御殿と雪隱小屋との區別がある。たま〳〵大きな建物があると、孰れも十七世紀頃に盛んであつた遺物で、辛うじて歴史の考證物となる位に止まる。道路も、人道車馬道の區別が、昔のまゝに殘つてをれども、素よりその習慣規則はやぶれて、勝手自由に人々は歩いてをる。それのみでない、すこしも

掃除をせぬから、そこかしこの隅には、塵埃が山のやうに積つてを

るし、馬の糞や犬の糞は、敷石も見えぬほどに堆くなつてをる。ま

た例の羊の肉などを、棒の兩端につるし、之を荷ひながら賣り歩くから、その肉よりあたゞる血が、所々にこぼれて、その臭さ厭はしさは、丁度支那町でも歩くやうで、胸のわるいといつたら、實にこの上はない。すこし横町に曲り込むと、道が狹いのに、この穢さがいよいよ加つて居るから、足の蹈場もない。また向ひ同志の軒から軒に、シヤツだの、ズボンだのを棒にかけて干してある工合などは、東京の裏長屋のやうで猶一層むさくるしい。併し土人は何とも思はず、この穢い道路に、平氣で寢ころんでをるものもあれば、立ながら小便をやつてをるのもある。その傍には飴屋のやうなものが、物を賣らんとて、變な音樂をしてゐやべつてをるやつもあれば、淫猥な女どもが、晝でも夜でも、そろ〳〵として三々五々手つながりして、笑ひふざけながら、歩いてをるのも見える。

一体になまけものが多くて、せつせと仕事についてをるものは數へるほどである。兵隊などが、番兵をしながら、長い烟管をくはへて、寢てをる樣子は、支那朝鮮のやうである。こんな風だから、いつでも賬合のは、たゞ安料理の前で、それは〳〵大混雜。次は珈琲店であるが、これは日本でいふ銘酒屋の類だから、曖昧物が多い。職人や何かゞ朝から夜をこほして、かゝるほこりにふざけ歩き、なまけころんでをる工合は、なるほど、亡國の兆でもあらうかとおもはれる。

鐵道馬車もあるが、馬は痩せ、車は小さし、埃だらけで、のろ〳〵こやつて居る。ここにうるさいのは、犬の多いことで、どこにでも、こゝにでも、ごろ〳〵と寢て居る。犬の中に道があるやうで、ゐかもそれらは大方痩せおころへて、病氣にかゝつてゐないのは少ない。

これは回教で犬を殺さゝる主旨に本づくといふことであるが、我が昔の犬公方様の時代は、こんなでもあつたらうかとおもはれる。殺されぬものだから、犬どもは馬車が來やうが、人が來やうが、すこしも攝はず、大道に太平樂を氣取つて居る。邪魔だからといつて、叱られもせぬ處か、馬車などの方から、反つてよけて通るやうな事になつてをるのは、人よりも犬が貴いと見える。

次には鳩の多いことだが、これも犬と同じ主旨から、人が取らぬゆゑに、鷄のやうにぞろ〳〵と歩いて居るさまは、我が淺草の觀音の庭見るやうな心持。土地の諺に犬と鳩との數は、市人よりも多い、犬中道だらけといふが、まあそんなものである。

公園なども所々にあるが、塵埃で仕方がない。そんな人の集まる場處には、燒鳥や燒羊など、烟をたゝて賣てる工合は、我が夜店に似た處もあるが、その臭きことゝいつたら、どても鼻持はならぬ。物賣人などが、天ビン棒をかついで歩いたり、背に物を重く負つて、腰をかゞめて歩く樣子は、我が國では格別めづらしくもないが、歐羅巴では餘程見ものである。

併し大通りになると、外國人の店が多く。外國人の旅館が多いから、土人のみの住んで居る處とは、非常な違ひで、實に清潔だ。又紳士用の馬

回教僧侶の舞樂

車なども數多備はつて、馬も肥え車も奇麗で、心持がよい。一体の家作りも、そんな處は、至つて莊嚴で、何もかも整つて居る。道路といつても、犬の數もすこしは少なく、公園などもすが〳〵しい。食物は土人の用ふるのは、西洋料理に、支那日本の料理を、ごたまぜたやうなもので、屢々試みたが、何分我々の腹にはおちにくい。ソップなどもいやに臭氣があつて、胸をわるくする。料理の中にパラミダといふ肴の鹽漬があつたが、それは鹽鯖とでもいひさうで、日本人の口には適するかとおもつた。一体に海岸だけに、魚類はあたらしくて、口に適ふものが多い。

珈琲は二三寸ばかりの小さな茶碗に、最も濃くごて〳〵したものを呑む。烟草は長烟管で吸い、又阿片をのむことが頗る流行して居る。椅子などは憑りかゝる處もない、四本足のまゝで、腰かける

處は、藁で組んで、その四本足は、繩で四角に卷いてある。卓子も之に類似して穢く、まして敷物も无れば、殆ど土のまゝである。併しこれも上等な處、外國人などの數多い處は、西歐の風、そのまゝといつてもよい。

衣服は土人は大股引ともいふべきものを穿ちて、膝または足のくるぶしにて繰つて居る。上衣は普通の洋服より袖の大きいもので、洋服流の釦留めではない、腹の下には革や織物で、帶をしめて、胸は大方おし出して居る。帽子は所謂土耳古帽子で、紅がら色の縁な

し、項上に三四寸ばかりのふさがぶらついてをる。これは上帝王から下官吏軍人庶民一般にわたつて同じ色、同じ仕立であるから、道を歩くのに、兵隊と庶民と、ちよつと區別のつかぬやうな心ちがする。女は夫の外の人には顔を見せぬが習はしで、道を歩く時には、覆面して目ばかり出して居る。その仕かたは、我が國の女が寒い時分にかぶる頭巾とは聊か違つて、今すこし大きく、ひだをたてて、猫の耳のやうに、小角を出し、頭から裾まで、大風呂敷然たるものでぐる〳〵と卷いてをる。これには、それ〴〵色の好みや、地の嗜みがあつて、紫も綠も白も黑も、こり〳〵で、そのさまは能で見る僧侶のやうで、中昔の畫卷にある山法師の行列とも、おもはるゝ姿である。

一体に男女の區別が大變にやかましい。たとひ夫婦でも同居は

せぬ。男は男の家にをり、女は女の家に住む。だから店や何かは男ばかりで、女は裏通りか何かに、專門に住んで居る。その家は窓なども嚴重で、容易に外が見えぬやうになつてをる。一夫多妻の敎法だから、男は力次第金次第で三四人五六人位は、妻を持つて居るが、彼の女屋に、それ〴〵部屋を與へておいてある。例へば某の第一の妻、第二の妻といふやうな工合になつて住んでをるのを、夫の方から時々見舞に出かける仕かけである。鐵道馬車などでも、男の席と女の席と

は必ず分けてあつて、ここまでも相違かつて居る。かやうにいふこ、いかにも、その間が嚴格なやうであるが、決してさうでない。反つて歐羅巴の中央諸國の婦人が、勝手に人の前に出たり、自由に夜會にいつたりしてをるものごもよりも、品行がわるくて、犬も喰はぬ騷ぎなどは、絶えぬこいふことだ。

婦人の服は、洋服とはまた變つて、矢張踏込みのやうな袴をはいて、筒袖のゆるやかなのを着、帽子は山伏の頭巾のやゝ大きいやうなものに、ふさがついたのを頂いてをる。耳環、腕環、頸環などは、更にかはらぬが、衣服帽子等はおしならして金糸の縫箔などが施してある工合は、餘程亞細亞風に近い。髪の毛や眼の色なども黑い方が多數である。

家の内にては腰かけたり、あぐらかいたりして居る。又日本の「やまとぐつ」もいふべきものを、はいてるのもある。寺にいつて見たが、參詣人は悉く履をぬいて、薄べりの上にあぐらかいて居る。ある僧侶のごときは、全く日本流に坐つてをるのもあつた。

この國には、さまゞゝな人種が入り込んで居るから、その風俗もいろゝである。その中で一番多いのが、いふまでもない土耳古人で、次に希臘人、アルバニア人その外、セルヴィア、ブルガリア、ルーマニア、アルメニア、マギアール、ギプシー、猶太、シルカシアン、印度、阿良比亞人種等もある。是等は多少容躰も違ひ、言語も違つてをるから、人間の勸工場は、こゝにも開かれてをる。

英獨佛等の人々も、無論來て居つて、夫等は大威張に威張つて居るから、土地の風も段々化せられるこ見えて、土人の中にも既に全く古俗を脱してをるものもある。

この國で立派でゆゝしいのは、騎兵で、丁度皇帝の寺詣の時に護衛していつた六百騎の武者を見たが、いかにも馬もふとく裝ひもよし、古代の武威も思ひやられて勇ましかつた。皇帝は馬車にてゆかれたが、數多の文武百官附隨して押し出した處は、さすがに堂々としてをつた。この國の武人は例の宗教に深く固く執心であるから、死を見ることは歸するがごとくで、戰爭はよほど強いといふが、いかにもさうであらう。たゞ訓鍊や何かゞ當世風でないから、軍規などは十分でもあるまいが、一死報國の念は、封建時代の武士の氣象を見ることが出來るといふこと。併し惰弱な氣風は、是等の上にも吹きわたつて、兵隊が醉ひなから、曖昧屋にくだまいてをることなどは、この町々では更に珍らしくない。

全体この國はバルカン半島の大部を占めて、歐羅巴から亞細亞にわたる要路に坐し、おかも露國の出口を握つて居るやうな譯で、國としては歴史からいつても、地理からいつても、等閑にならぬ處である。然るに昔から宗教はまるで西歐諸國と違つて、今に至るまで基督教を奉せず、一夫多妻でやりとほして居るなどは、ちよつと珍らしい。ことに憲法もあるけれども、更に行はずして、君主獨裁の壓制主義であるし、文字も羅馬字を用ひずして、彼の右から左にかくのでやつて居る。從つて普通語も土語で、止むを得ざる場合でなければ英語や佛語は用ひぬ。政治も財政もおどろへながら、風俗もみだれながら、舊式で平氣でをるのは、無神經で馬鹿で、東洋の支那のやうな風もあるけれども、大陸文明の風が始終吹いて來る位置に居つて、一向に移らないのは、また一種の國風として見ねばなるまい。夫にしても犬の吠ゆる聲ばかりやかましくて、家屋

や道路のくさくて〳〵、足も手もつけられぬのには、閉口せずには居られぬ。嗚呼バルカン半島は、將來どんな事にあらうか。我が日本國では、未だこの國との條約は成り立つてをらぬ。從つて領事館も无い。

加奈陀鐵道

北米合衆國の北部に當つてをる加奈陀といふ處は、世界の大農業國であるかも新らしいから、人間に譬ふれば恰も青年時代のごとく、元氣が充滿して居るおもしろい土地である。こゝは七州に分れて、オツタワといふが首府だが、我が國から行くには横濱から船にて、晩香坡に直航し、加奈陀鐵道に由つて達するのが一つ、また同じく横濱を出でゝ桑港に至り、それから更に鐵道を經てゆくのが、一

つである。

その加奈陀鐵道は、世界中でも有名なものであつて、その線路中には、いろ〳〵珍らしいものも、かはつた處も見られる。

そも〳〵加奈陀といふは、もとは佛蘭西人の發見したものだが、今では英國の領地である。その境界は、北は北氷洋に接し、南は合衆國に續き、東は太西洋に臨み、西は太平洋及びアラスカに接してをる。面積は五十六萬方里あつて、全大陸の三分の一以上を占めてをる。この地は大森林あり、大原野あり、また大山巨川があつて、最も農工業に適し、非常の速力で文明の域に進んでをる。その加奈陀鐵道といふは、加奈陀太平洋鐵道と稱して、北米合衆國の太西洋岸から太平洋岸に達する線路中の一つで、モントリールといふ處より晩香坡に至るもので、その長さ二千九百〇六哩ほどある。こ

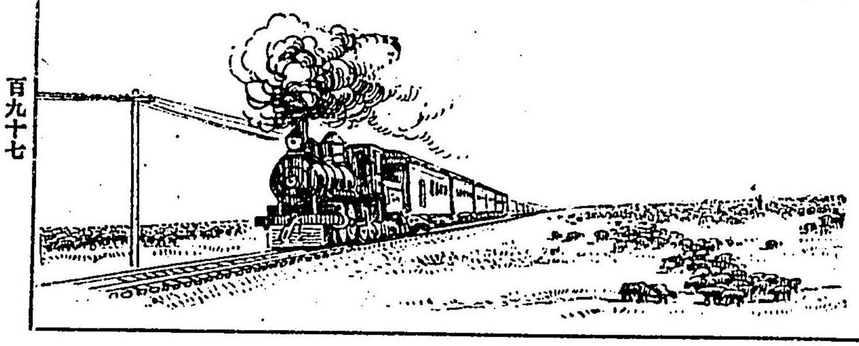
の間に名高い落機山を超えてゆくのだから、その愉快はこの上も无い。

晩香坡からモントリールまで、さつと五晝夜ばかりかゝる。鐵道は廣軌だから、我が東海道鐵道や日本鐵道のやうに、究屈ではない。汽車には一等から三等まであるが、長い事でもあるし、道中は山と野とが多いから、車室は旅客の退屈せぬやうに丁度自分の家にでも居るごとく、最も便利に最も愉快に出來てをる。即ち寢室もあれば、飲食店もあれば、運動室もあれば、喫烟室もあれば、化粧室もあるといふ事になつてをる。

その寢室はどうかといふに、近來は我が汽車にも設けられたが、これは我に比しては、車が廣く大きいだけに、緩りと工合よく出來てをる。

一等室の腰掛はビロード張で、左右の窓によりて四人づゝ

向ひ坐し憑りかゝることの出來るやうになつて、手カバンなどは、その腰掛の下に入れる事にしてある。室の中央は即ち共同道路で、乘合の客が往來するに、十分に腕をふつてゆく餘地がある。夜になると、この腰掛を引き出して、二つの寢臺を作り、又天井の板を引きおろすと、忽にして同じく二つの寢臺が出來る。蒲團もあり、毛布もあり、枕も備はり、帶紐解き、手足を伸して、十分安眠するに差支ない。又一人ごとに寢臺の前には、帳を垂らすやうになつてをるから、決して寢姿のいかゞはしいのが、互に見ゆるやうな不体裁は无い。ランプは處々の天井から下げてあつて、所謂瓦斯ランプだから、光線は柔



かで、夜でも苦勞なしに書を讀むことが出來る。月の照る頃などは寢ながらにこの窓から、山川草木の走つてゆくのを見る工合といつたら、隨分のんきで、夢の千里に馳するのも當然とおもはれる。

朝になると一同起き上る。すぐに化粧室に押しかける。こゝには姿見の鏡もあれば、もとより水や湯は、ざあ〳〵と流れ出づるやうに仕かけてある。櫛もあれば、シャボンもあり、鋏もあり、耳かきもあり、爪こすりもあり、無論手拭はいく筋となくかけてあるが、日本流のはない。穢い申し分だが、便所はその隣室に控えてをるが、例の一度ごとに水にておし流すやうになつてをれば、すこしも臭氣は无い。

この化粧室でごた〳〵してをる中に、彼の寢臺は取片づくれば、かへつて見ると奇麗に、もとのお座敷に化してをる。西洋人が日本

の座敷に何にもないのにおどろき、客が來ると、いろ〳〵持ち出すのにおどろき、やがて用がすめば、本の無一物になるのにおどろくといふが、この車中の寢臺の迅速に出たり引込だりするのには、我々もおどろかされずには居られぬ。

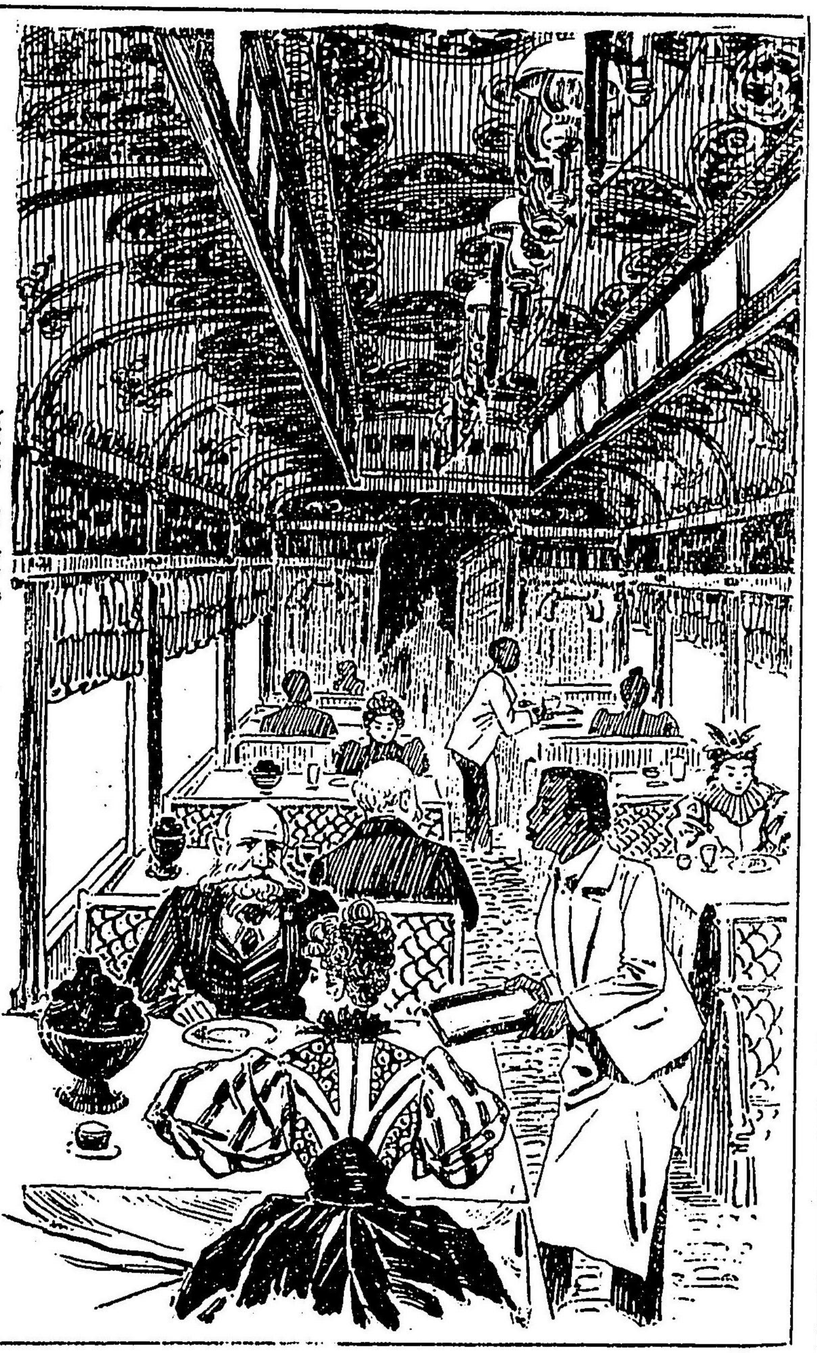
飲食室に至れば、丁度普通の料理店に入つたやうな心地がする。まづ入口には給仕人が燕尾服で立つてをる。これに刺を通じて、それが導くまゝに食卓につく。獻立の書付が出づる。好きなものを命ずる。程无く持つて來る。やがて會計となる。その順序立ちて紊れざること、旅の辨當喰ふやうな考へはおこらぬ。こゝには無論いろ〳〵な酒も茶も烟草もある。菓子もある。菓物もある。何でも錢さへ出せば不自由はない。

食後には婦人を除く外、大方喫烟室に集まる。こゝではシガーや

シガレットをばつばこふかす外に、カルタも將棋も無駄話するこをも自由である。これは言ひ換ふれば、乘客の倶樂部とも見らるべき場處である。素より夜を徹して、ランプも輝いてをれば、始終詰め切りでをつても、誰も小言を云ふ人は无い。

線路の工合によつては、この飲食車をつけぬ處もある。そんな處は、必ず食事時間にいゝ鹽梅に汽車が止まるやうになつて、そこにはナヤーンと食堂が待ちかまへてをる。ズーッと飛び込んで給仕人の目くばせによつて、卓子につき、急ぎながら飲み、急ぎながら食うて、自分の車室にかへつてくる。大抵食事時間といふは極まりがあるから、そんなに大騒ぎするにも及ばぬ。

こういふ處の食堂は、隨分美麗に飾りたてゝあるもので、庭園などには花さき鳥なき、噴水が數十丈に上つてをるなどは、寧あたりま



へで、どうかすると食事中音樂を奏してをることなどもある。

一体この車は先から跡まで、即ち車のつゞいてをる限りは、勝手に歩かれるから、退屈の時には、一等から二等の方にゆくことも自由であれば、無論三等の人が、一等に來ることも禁じない。

又線路中で、最も景色のいゝ處になると、見物車とも名づくべきものを附加する。この室は自由椅子になつてをるから、腰かけながら、左でも右でも見られるやうに出來て、頗る調法である。寫眞師なごは、わざ〳〵この線路の景色を取るために、乘込むものもある。

さうして、例の早取機械で窓からのぞきながらやつてをる。景色の外に、是等の事を見てをるのも、また退屈醒しの一つにはなる。

又この汽車には、雜誌寫眞小説本など賣るものが、必ず乘り込んでをるから、こんな奴を相手に一日や二日は、すごすことも面白い。

一週間も汽車に在ると聞くと、何だかつらいやうだが。そんなものではない。

汽車全体に通じて、掃除をしたり、寢臺を上げおろしあたりするものは、重に黑ン坊である。その色の墨のやうなるに、白紙のやうな襟をかけて、働いて居る樣子は、碁石のお化けのやうで餘程珍らしい。彼が飽くまで厚い赤い唇を動かして、話す工合は頗る愛嬌がある。

落機山を横貫してゆくのが、この汽車の最も値價のある處だが、それは〳〵想像にもまして壯快である。この間丁度一晝夜ばかりかゝるが、谷深く山高く峯嶮はしく、檜や杉の大木は林のごとくに立つて居り、岩石のこゞしいのは、虎のごとく獅のごとく構へて居る。鐵道はこの間を縫ひに縫うて、あるは數十哩の高きに上り、或るは數十哩の低きに下り、隧道をくゞり、川に添ふなど、その變化は

極まりがない。アルパルトキャニオンといふあたりは、殊に山水の景色がよいから、停車場はないけれども、車は時々ごゞまる。こんな時には、例の見物車の上からでも、または一寸降りても十分に見ることが出來るが、それは〳〵日光箱根の比では无い。峯の高き處には、雲は常にゆきかひしてをる。大瀧小瀧のたえずおちたきつて居るさまは、天より帶を垂らしたやうである。谷を望めば藍のごとき水は、白き波を大巖に打かけ〳〵して、おしすゝんでゆくさまは、凄じいとも何ともいはれず、虬や大蛇は、かゝる處に住んでるだらうと思はれる位。汽車は黑烟を吐いて、龍の昇るがごとく、この峯におし上り、またこの谷に添ひてゆく。

グレシヤーハアウスといふは、あまりに山が高くて四時雪がきえず、氷り〳〵て一つの峯を成してをるが、いかにも涼しくすが〳〵

しい。ここに夕日の遠くより照りそひて、雲の隈ごるありさまは、瑞西のモンブランもおもひ出され、我が芙蓉峯なづかしくおもはする處である。姉妹岩などもこのあたりに見えるが、いかにも睦しく雪を頂いて並び立てるさまは、姉妹連れの初嫁のやうだ。

ステツフヘンといふ處は、線路中での絶頂だが、海面を拔くこと一萬五千尺といふ。こゝは四方の峯々を見おろして、自分ながら急に背の延びたやうな心ちになる。この雪の雫が東に流れるのは遂に太平洋に入り、西に落ちるのは、遂に太西洋に入るといへば、一つは日本人のお白粉下ともなり、一は歐羅巴人の紅水ともならぬことも限らない。ステツフンとは、この鐵道を開いた時分の、社長の名ださうだが、紀念の爲に、こゝに負ふせたといふことである。こんな大工事を竣功したから、その位の名譽の報酬は當然であらう。

是からは線路は段々こ下り道になるから一射千里の勢ひで、車は飛び出す。フレイザーといふは、有名なセントローンス川などに次いで、加奈陀の重なる川であるが、車は常に之を添うて走る。ここに珍らしいのは西洋人のいはゆるアメリカンインヂアンと稱する土人が赤黑いやうな色をして、獸の皮や木の皮などを躰に卷いてをるのである。これはもとこの國の地主であつたが、今は歐羅巴人に征服せられて僅に殘つてをるもので、あはれむべき種族である。是等の家は材木を積み

重ねて、我が奈良や京都の古寺にある校倉といふやうな風に建築してをるので、餘程古代だ。又この川のところ〳〵に、小さいいかがしい舟がうけてある。これは一本の木をくりぬいて、舟につくつたもので、印度の土人なども、之を用ゐてをるが、未開時代には、いづこの國人も、つかつたものだ。これは漁をしたり、または物を持運ぶ爲に、土人の乘るものと見える。こんな處だから雨ふるかとおもへば晴れ、晴れるかとおもへば雨ふり、天氣は常に定まらず、從つて美しく奇麗なのは、山より川にかゝる虹のかけはしである。峯の雪は白く、川の水は青きに、この虹が五色の砂子をふりかけたやうであるなどは、都では嘗て見られない大きいけしきである。さて山をおりて野原に出づると、まるで打つてかはつた眺望で、山もなく丘もなく、平氣の〳〵平野である。氣候のあまり寒く无い

處は、畑に仕立てゝ、大きな農業機械で、一里も二里も、曠く間にすきかへしてをるなどは、小さい花園めいた我が畑のみを見た目うつしには、錦魚が太洋を見たやうな鹽梅。

牧畜場が處々にあつて、牛や馬が起たり寢たりして、をるのもおもしろいが、最も目のとまるのは、羊のむれである。彼はその毛がむじや〳〵して、よこれわたのやうで、一匹を見ても變だが、千も萬も群がり遊んでをるのは、頗る異やうだ。またこのむれには必ず犬がつきそうて、番兵の代りを務めてをるなども奇である。

處が處だから見馴れぬ草花なども咲きにほうて、中にはあはれなものも多い。例の土人はこの邊にも住でをることゝ見えて、その

いかゞしき顏つきにて、幼き兒の手をとり〳〵に、花摘などの遊びをしてをるのは、やはりこの人種にも風流を愛する一點の眞心が

存してをると見える。この大野の中に所々停車場があるのは、この汽車の爲に新に町の開けたので、戸數の二三千もあるとおもはれる處が數々ある。毎年世界各國より、殖民するものが多いので、段々と開けゆくさまは著しい。

このモントリール行の汽車をすこし迂廻すると、世界で有名なナイアガラの瀧も見られる。この瀧は人も知てるごとく加奈陀の側と合衆國の側とに二分しておちてをるが、加奈陀の側の方は、幅が凡そ八町高さが凡そ百七十八呎、合衆國の側の方は、幅が凡そ三町高さが凡そ百八十呎で、たつた一分時間に落ちる總水量が一千五百萬立方呎といへば、その盛んな事は想像せられるだらう。日光の華嚴や霧降が、どんなに悔しがつて、逆さまに落ちたといつておつゝくことは出來ない。

この加奈陀太平洋鐵道會社は、所謂モントリールに在つて、こゝは同地第一等の商業繁盛の地である。北米合衆國、及び加奈陀地方は、元來その山河も原野も非常に巨大であるから、從つて一体の景色が、甚だ疎大である。山といへば、頸の曲るほど見上げても目の屆かぬやうに高いし、川といへば海のやうに廣く深く、野といへば數千里もつゞいて一本の木だに无い。こんな譯だから自然と人の氣も天然に馴らされると見えて、同地の人は日本人のやうに、こせついて居ない。その代りに相撲取が雀さすごとく、馬鹿殿樣が錢勘定するやうな見えもある。世人が動もすれば、米國は風景に富んでをらぬなどゝ想像してをるのは、少さな箱庭のやうな景色ばかり見た目から割り出した算用で、本統に天然の美を味はうたら、この國に景色が无いなどことは決して云ふべきものでない。

この加奈陀鐵道に乘る利益は、その工事の盛なるを知るばかりでない、この大陸の森林原野の大方を知り、人種の興廢を考へ、牧畜農業の如何を知り、併せてその廣大なる天然の美を知る智識を得ることが出來る。だから有爲の士は、乘り試るもまた一興であらう。

蘇士運河

我が國から西洋へゆくには、二つの大なる航路がある。その一つは横濱から東をさして、太平洋に乘り出し、米國の桑港または晩香坡に上陸し、それより加奈陀鐵道によつて、紐育に出で、更に太西洋をわたつて、歐羅巴に着くのである。これは變化が多いかはりに、僅に一ケ月と二三日にてゆきつく。今一つは日本海より西にむけて、支那海に出で、印度洋をわたり、紅海地中海を經て、ゆくので、これは少くとも四十四五日は、海の上に費やさねばならぬ。

蘇士運河といふは、即ちこの紅海と地中海とを遮ぎつて居る阿良毘亞の大沙漠を鑿り割つて、海中をかよはせたので、現世界中、最も大きな運河である。

今より三十二年前までは、この大運河がなかつた爲に、歐羅巴、阿米利加亞細亞三洲の交通が頗る不便で、貿易などは容易に出來なかつた。或は波の荒い喜望峯を迂廻して、辛うじて相通じたり、或は人影も稀なる阿良毘亞の赤野を通りて、やつと貿易するといふありさまで、その中には風濤の爲に船が沈沒したり、黃埃日射の爲に、人が惱んで死んだり、その困難といふは大抵な事ではなかつた。依てはこの地峽を開鑿して、東西交通の便利を圖らんと、早くから企てた人が多かつたが、中々思ふやうにゆかなかつた。奈破翁第

一世が埃及を征伐した時にも、この事を思ひ立つたけれども、矢張さし障りがあつて、行はれずにしまつた。

その後、佛蘭西人に、フエルヂナンドドレセップといふものがあつて、暫く埃及國にいつて居り、大にその國王に用ひられ、遂に王に說いて、この地峽鑿り割りの事を以てした。王が大に賛成したからレセップは佛國に歸りて、この事を謀りかけたが、初の間は一人も賛成してくれるものは无い。併し一旦決心して、地球上の利をはからんと覺悟したれば、熱心に熱心を加へて、再三再四、この事を主張し、や、同意を得て、埃及に大關係ある土耳古、または英國にゆき百方鑿割りの利益を說いたれども、妨げする人ばかりで、なか〳〵纏りがつかぬ。この上は致方が无い、一身を犧牲に供しても、この事業を遂げずにはおかぬと、人の誹謗惡評も、蚤の喰ふほどにも思はず、一生懸命に說きまはつた。精神到れば巖をも透すといふ譯か、初の程は殆ど相手にもあなかつた面々が、段々と、氏の說に靡いて、遂にこの大事業を、レセップに一任することになつた。そこで埃及が主で佛蘭西が之を助けて、資本金をおろし、他の各國よりも義捐するものがあつて、一千八百五十九年四月廿二日に、愈々この工事に取かゝつたが、思ふやうに事が運ばぬ。その中には焦死する職工があり、同盟罷工の聲が聞える。金は足らぬ。本國にては山師の利己主義の仕事だなどゝ惡口は絶ゆる隙が无い。レセップは思ひ込んでは、死ぬよりつらい事ばかりだつたが、自分の所信を貫かぬ中は決して死なぬ、人が鐵砲うちかけても、彈丸などは喰つてゐまふといふ勢ひで、ごん〳〵こやつた。熱心といふは、おそろしいもので、遂には世の誹謗も絶えて、一千八

百六十九年、我が明治二年の十一月十六日に、この大工事が見ごとに成就した。　この間十年、人を用ひたこと二萬五千人より三萬人に及び、金を費したこと、殆ど二億圓に達した。　同じく十七日から航通をはじめることゝなつた。　運河の長さは八十七哩、その間にメンザレー、バラー、ナムザー、ビッテルといふ四の湖があつて、その長さが二十一哩だから、實際の運河は六十六哩である。　その幅は廣き處は三百尺、狹き處は百七十四尺、深さは通して二十四尺であつたが、後に段々とふかくし、遂に二十八尺半までに堀りなした。　これが今の運河である。　こんな譯だから、この運河は埃及人と佛國人との所有であつたのを、營利に拔目の无い英人は、こう〳〵策をめぐらして、その國の物として、今は一切の權利は英國人に歸してをる。

この大便利が出來て以來は、誰も危險を侵して、長日月を費して、喜望峯廻りするものはなくて、皆こゝを通る。　だからその繁盛は一通りでない。　そこで英國人は、その通行する船ごとに、噸數に依つて稅を取り立てるから、その儲かりかたは、又他に類を見ないほどである。

こゝを通過するのは、世界各國の軍艦や汽船などであるが、我が國も日本郵便會社が、歐羅巴航路を開いてからは、いつも通航して居る。　そうしてその稅金の拂ひかたも大したものである。　余が乘つた備後丸も、片路三萬圓とられたと云ふこと。　沙泥のさらえや何かで費用もかゝらうが、實に非常な利益のある運河である。

前にも言つた通り、こゝの深さは二十八尺半だから、船の喫水が二十三四尺までは、平氣に通行が出來る。　然るに先年我が帝國軍艦

富士號が、二十六尺六寸の喫水でありながら、こゝを通らうといふから、世界航海者の注目する處となつた。

新開の日本國、海事に熟錬ならざる日本士官が、どうして通行が出來やうなど、あざけり半分に思つた奴もあつたと云ふことであるが、その時の回航委員は敏腕揃ひであつて、平氣に安々と、大手をふつて通行した。そこで世界中の大評判となつて、日本海軍士官は、實にえらいものだといふことになつたが、考へて見れば無理もない。

この殆ど九十哩ばかりの運河は、どういふ風に出來て居るかといふに、大沙漠を切り割つたものだから、兩岸は岩石と沙とで、高い堤防がある譯でも、嚴めしい、石垣が築いてあるのでもない。ズーッと滑らかになつて居つて、處々には薄だの菰見たやうなものが生

えてをる。松や茅もあるやうだが、日本で見るのとは少々違つてをる。水は極めて清く澄んでをるから、魚などの游ひで居るのさへ船から見える。

この運河には五哩六哩ごとに、ステーションがある。そこには信號標木が立つてをる。河幅が狹いから、兩方より船の出逢ふ時には、衝突の恐がないともいはれぬ。依つてさういふ場合には、ステーションの役員が、この信號標木の上に高く小旗を擧げて、知らせると、どちらかの船が、片かたに寄つて、一方をあけるやうにすることに定めてある。この場合には、運河通行中必ず附き添うて居る水先案内船が、その止むべき本船の首部から大綱を執つて、丁度馬子が馬を曳くやうに、岸がはに引きゆいて、その綱を大きな鐵杭に結びつける。そこで本船は梶を取直して、靜に運動を留めて居る

と通行すべき船は、一禮して、その脇を徐に過きゆくといふ工合で、互に禮義を守つてすれ違う。そのありさまは、いかにも殊勝でおもしろい。夜に入ると、どの船でも探海燈を船首に取りつけ、光りを放つてゆく。これは運河に入る時に用意して取り付る事だが、その用意无い船には、會社から貸すやうな仕組になつてをる。この燈光といふは、軍艦に用ふるもので、海を照らすこと數十丁、まるで晝のやうになる。ここにその光は自由自在に曲げられるから、どの方角でも見られる。兩方の船の光りが折れ合つたり、又はすれ違つたりするありさまは、丁度音のない夕立の空を見るやうで、きら〳〵と輝いてすさまじい。

運河を通行する間は、あまり速力を進めない。これは前言つたやうに、五六哩ごとには、互に止めねばならぬこともあり、又は河身の狹い處などは、急ぎにくい事情もあるからで、どの船でも大凡十四五時間かゝらねば、全く通り拔けることは成らぬ。

その通行中は、夏などは暑くて堪らぬが、その景色といつたら、隨分かはつてめづらしい。兩岸は何千里何萬里あるか分らぬ大沙漠で、目の屆く處が无い。樺色の土が高くなつたり低くなつたりして、火事場の跡でも見るやうな心持。

おもしろいのは、彼の隊商といふもので、土人どもが五六人打連れ、駱駝に乘つて、商用の爲に、この沙漠を横ぎるありさまである。人間は總て黑ん坊だが、頭を白布でぐる〳〵と捲き上げ、駱駝の背から腹にかけて、いろ〳〵な物を下げてゆくさまは、餘程奇態である、又この沙漠中に處々に土人の家が在る。それは巖石によつて檳榔樹の葉や何かで、雨蓋ひ日蓋ひしてるのもあり、または木や石を

併せ用ひて、掘立小屋のやうに造つてをるのもある。現今の人間ごしては、實に最下等の住居であらうが、未開時代のありさまはごこもこんなものであつたらう。

こゝの土人は、眞の黑ん坊で、白い處はたゞ齒のみで、若し暗闇に是等を立たせておいたならば、齒の行列のやうで、外の部分は見えぬだらうと思ふほどである。素より着ものごては无い。はだかではだしで歩いて居る。たま〳〵持てるものは、何の風彩もなくただ長いきれを勝手次第に躰にまきつけてをる。女の年頃になつたものは、さすがに半身位は蓋うてをるが、もごより履物などの考へは夢にもあるまいごおもふ。ぞろりと立つてる處なごは、男だか女だか猩々だか猿だか、ちよつと區別がつかぬ。

船が通行すると、是等の動物ごもが、兩岸を走つてオーイ〳〵と叫びながら、十人も二十人もやつて來る。割合に背も高く足も長いが、痩せおごろへてゐるから、そのありさまごいつたら、地獄の餓鬼が、やけごしたやうで、恐しくもまたあはれである。何の爲に走り來るかごいふに、彼等は悉く食物をねだるので、或は兩手をあげて、よびかくるもあり、食ふまねして頻に哀を乞ふのもある。試に麺麭か蜜柑か、ビフテキの切れでも投げてやると、その爭ひ拾ふことの速かさ工合は、よほど貰ふことに熟錬して居るごおもはれる。若し誤つてその品物が、岸までつかず海の上におちる時は、彼等は直ちに水中に躍りこんで、我先にと拾ひ上ぐるさまなごは、珍らしい見物である。

河身最も狹く、殆ご一足にて岸にもゆかれやうと思ふ處になると、彼等はうるさきほごに同盟して、聲をそろへて請求する。あはれむ

べきものと思うて、物をやれば際限が无く、やらねば悪口するほどにすれてをる。あまり烈しくねだるから、余と同乗せし或る西洋人が、おごかしにピストルをその方角むけて、二三發放つたが、彼等は負けずに、あたりの小石を取つて、ポン〳〵と船へ打ちつけた。始終船が通るから、ひやかされつけて、横着になつた奴もあるだらうが、一体に黑人は性質極めて獰悪といふことだ。

河の上には處々に沙さらえの船があつて、常にさらえてをり、また岸邊には、おしならして杙が打つてある。赤く白く塗つた浮標のぽか〳〵してをるのに、鷗や千鳥が翔つてをるさまなどは、優しい見ものである。ここに彼の湖の處に至ると、水が綠りに波が白うさや〳〵と岸に打よせてをるありさまは、景色がよくて、琵琶湖でもわたつてるやうな心持がする。一体に日本の方からゆけば、島

も鳥も容易に見ることの出來ぬ印度洋をわたつて、こゝに入るから兩岸の陸地が燒野ながら甚めづらしい。又歐羅巴の方から來ると、地中海を通つて、やう〳〵暖國に入る口で亞細亞くさくなる工合も珍らしいから、その通行中は格別長くは感ぜぬ。ここに夜になつて月でも出やうものなら、土より出でゝ土に入るといふ見えで、何の目障りも无ければ、陸地はさながら海のやうな感じがする。暖國の故か、その月の色もよほど赤ばしつて、ぎらついてをる樣子が、歐羅巴の中央や、日本で見ることは、別物で、天地が近いやうにおもはれる。

蘇士の入口とポルトサイドの入口には彼のフエルヂナンド、ド、レセップ氏の銅像が、ニューッと聳えて、その大名譽を萬世の後まで輝かしてをる。初に言つたごとく、我々が印度洋をわたつて、五十

日以内に、五六千里も離れてをる歐羅巴にゆくことが出來るのは、全くこの人の撓まず屈せざる精神を以て、一身を抛つて、この大事業を成し遂げた御蔭である。氏が全世界の貿易に與へた利益、また東西人の知識を交換することの便利を與へた効能といふは、實に莫大なものであつて、僅に一國や二國で、もてはやされた政治家などよりも、よほど豪傑といはねばならぬ。實に氏の仕事は世界的で、その銅像が、こゝを通行する幾億萬人に、仰ぎ敬せられるのもあたりまへである。

西洋の文明を凌いで、その上に出でやうといふ我が日本國の今日は、愈々ます〳〵奮發して、一身をさゝげて、世界的大事業をおこし貫くといふ決心の人が、數多出なければならぬ。それにはレセップ氏が、蘇士運河をやりとほしたのは、よい鑑であらう。

西洋各國の公園

西洋とは我々の住んで居る東洋に對していふ稱號で、即ち歐羅巴洲の事である。佛蘭西だの、獨乙だの、英吉利だの、露西亞だの、墺太利だの、伊太利だの、和蘭だの、白耳義だのと云ふ國々の在る處である。彼の山水の景色に富んで居る瑞西も此處で、瑞典、丁抹、諾威などいふもこゝで、それから昔威張つて今はやゝ衰へてをる西班牙や葡萄牙も、又は土古耳の大部分も、やはり西洋といふ中に入つて居る。

此にまた阿米利加合衆國といふ大洲がある。これは歐羅巴ではないけれども、歐羅巴人が移住して國を爲したものであるから、猶西洋と同じ風の開化である。

是等諸國は濃かに分てば、人種も言語もかはり、從つて各その開化に相違があるけれども、我々日本人より大づかみに、ざつと見れば、その趣が、まづ同じやうに見える。これ日本とは、ご異りしてをるから、譬へて言へば、馬のむれから、牛のむれを見るやうな心持がするのである。馬でも牛でも、能く〳〵見れば、一匹々々に、その毛色から面つきから、歩き工合から違つて居るけれども、大体から見ると、鳥渡牛は牛、馬は馬と同じやうに見ゆるごとく、日本人の目から大やうに見ると、西洋各國の開化は、一樣の心持ちがするのである。これ日本と西洋とは、國もあまりに遠く、人種もあまりに違ひ、それらとの交際も、また僅の年月であるからの事であらう。

そこでざつと見て、我が日本と違つてをる西洋各國の公園のありさまを書き、向うの小供等が、どんな工合に遊んで居るかを述べま

せう。

西洋各國の家は、石造か煉瓦造かであつて、日本のやうに木ばかりで組立つるといふことはない。その石なり煉瓦なりも、段々と進んで、近頃はその骨組は鐵にかはつてゆくやうな傾が見える。田舍の百姓家は取除けものであるが、市街を爲して居る處は、その家の大きいこと〳〵、見上るやうである。大方は六階七階又は十階十一階などのもあり、阿米利加の紐育などには、三十階に達したのもある。是等の家には、大方機械で昇り降りするので、どても階子などをコツ〳〵と歩んではをられない。

土地も家も價が高いから、日本のやうに一家族で一家を專有してをるといふことは容易に出來ない。大方は一家には數十百の部屋があつて、その一部屋丈を借つて生活してをる。故に例へば同

じ一番館の中に、一階の右がはゝジョンさんの一家が居り、左がはゝゼームスさんの家族が住むといふ風になつてをつて、銘々に庭を持つて木を植ゑたり、錦魚を飼つたりするといふことは六かしい。やつと僅ばかりの椽の上に鉢植を並べたり、部屋の隅に鳥をかつてをつたりする位の事である。窓はガラスで、建物は厚い木で、日本のやうに紙障子などは更に无い。だから空氣の流通は、我々日本人の家のやうによくないは當然である。そこですこし暇があつて、我々なれば庭にでもおりて、青いものを見、よい空氣を吸はうと云ふ場合には、一家擧つて公園に出かけてゆく。

こんな必要から、西洋には公園の數は非常に多いが、いづこも〳〵頗る清潔で、甚立派である。町の中のわるい空氣の中から飛んで來ると、極樂淨土とは、こんな處と思ふ位に、いゝ心持がする。丁度

錦魚がその鉢の水を取かへてやると、嬉しがつてあちらこちらと游ぐやうに、多くの人々が、此に來ると、その顏色までかへて悅んで居る。

但しその公園の赴は一つ〳〵違つて居るが、一般におしわたつた風がある。

それはどこの公園にも、大方鐵柵があつて、勝手次第にどこからでも出入することは出來ぬ。必ず定まりの門によることで、その門は餘程いかめしく、立派に築きなされて、いく處にもつけてある。最も巴里のボアーといふやうな一里四方もある大公園には、四方に鐵柵はないが、正門は極めておごそかに立てられ、まはりは土手にて自然と隔をつけてある。

各公園には、樹木が青々とさかえ、水が滔々と流れ、花は春秋はいふ

までもなく、夏でも冬でも咲いて居ると云ふありさまである。道路は縱横自在につけてあるが、その他廣い部分は、芝生である。これは佛語でガーヂンといふて、日本の芝とはすこし性質が違つて、麥に近いものださうだが、いかに雪がふつても、霰がこぼれても、色が變らず青々としてをる。その上には鳩が遊んで居る、雀が躍つてをる、池の雁や鴨が、時々押上つて、ゆた〳〵と歩いて居ると云ふ風で、さても〳〵賑やかな仕掛である。

その鳥の聲をきゝ、その花の色を見、この清き空氣をすつて休息せん爲には、數多の椅子、數多の腰掛は到る處ごとに、体能く並べてある。

又大理石だの、銅などで作つた昔からの英雄豪傑の像や、さま〴〵の神さまの像など、かしこの木蔭や、こゝの池の邊などに立られてある。

西洋各國の公園

水まきの男は大きなズボンをはいてポンプをかゝへてそこゝにスー〳〵と霧雨をふらせてをれば、治安を保つための巡査は、正服をつけて、ソロリ〳〵と、この園中を廻つてをる。

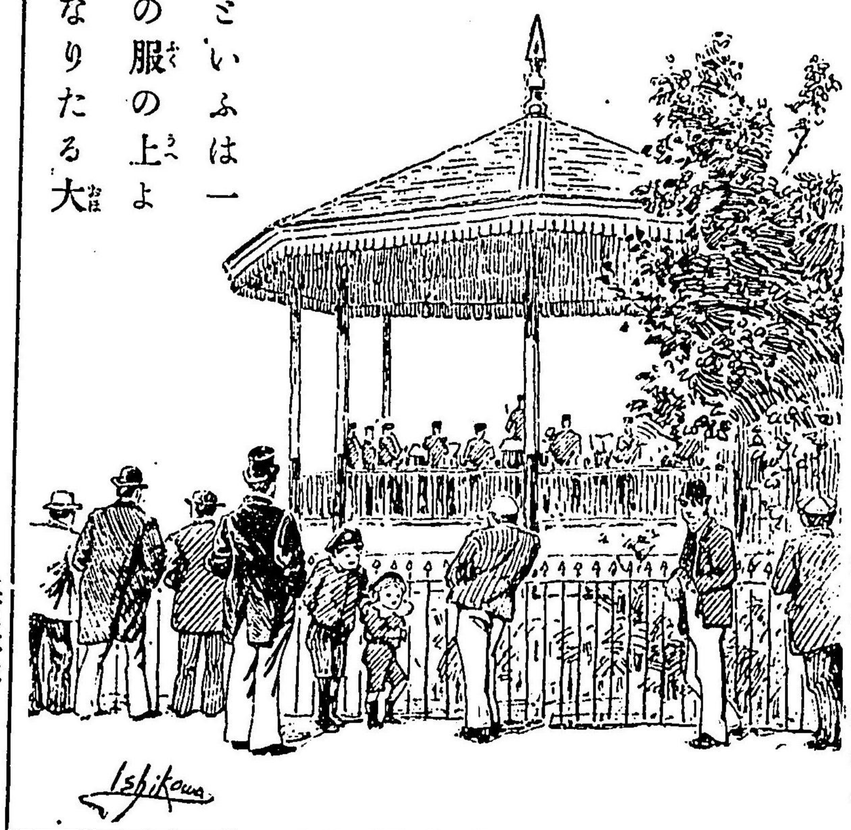
又公園によつては、その中に博物館もあれば、動植物園もあり、音樂堂もあれば、茶屋もある。或は臨時に茶番狂言や、あやつりなどを催す處もあれば、競馬や運動會などを行ふ處もある。

その寄り集まる人々は、どんな工合か

と云ふこと、それは〳〵さま〴〵である。人間の展覽會ともいはうか、遊戯の共進會ともいはうか、流行語の社交的倶樂部ともいはうか。この間には國だの人種だのといふ境も爭もないやうに思はれる。

お婆さんは子や孫に助けられて、椅子に憑りて花を賞し、小供はあちらこちら、ちよろついて鳩を逐つたり、輪を廻はしたりしてをる。お孃さん連は、書籍を讀んだり、毛糸を編んだりしてをるし、若い男どもは凧を上げたり、自轉車に乘つたりしてをり、下女は半巾を縫つたり、傘のさきで地に字を書いたりしてよろこんでをる。その中には駝鳥に車を曳かせて、相乘りして來る少年もあれば、大象、駱駝などに、四五人打重なりて笑ひ興じつゝ來る少女もある。最も可愛いのは、小さい兒を、悉皆白裝束せさせて、搖籃の中に寢せ、

顏の上よりは、更に白色の薄絹を蓋ひて、籃には赤の薔薇や、紫のすみれなどを挿みたるを、乳母がそろ〳〵とおしゆくに、その子の姉兒とも見ゆる五六才より七八才の兒が、足長う蹴出して、活潑に追ひすがるを、母なる人が危し〳〵と制しつゝ運動し歩くさまである。この乳母といふは一定の服裝があつて、普通の服の上より頸から裾まで一つになりたる大



風呂敷のやうなものをひきかけ、更に頭巾を大黒様のやうにかぶ

り、そのあまりの長さは五尺餘もあり、幅は七八寸もあるべきを、二

すぢにして、長々と背後へ垂らしゆくさまは、風がはりでおもしろい見えである。

最も感心なのは、お母さんが、その小供を樹の下の腰掛の上などで、書籍を教へたり、又唱歌のおさらえをしたり、或は水族館に連れゆいて魚の性質を講釋したり、植物園に入つて、この松はどこの國のだの、竹といふものは西洋には少ないだのと云ふ理屈を話しきかせて居ること。小供などが咲き滿ちて居る花を一ふさたりとも折り取らぬことゝである。

最も睦まじく見えるのは、一家族集まりて、網袋の中から新聞紙で包んで來た肉だの麵麭だの菓物だの取出して、車坐になつて食ひつゝ歌謠つたり話したり寢ころんだりしてをるさまである。是等は自分で小さな椅子や腰掛を持つてゆいて休むもあれば、芝の

上にそのまゝ足を出してをるのもある。日本流にうすべりや、げつたを持ちゆくものは見えない。

最も活潑なのは、女も男も馬に騎つたり、船をこいだり、自轉車を競爭したり、綱飛したり、ベースボールだの、ロンテニスだの、かくれんばう、鬼子などしてをることである。日本と違つて五六十の老人も、小供と一處に顏を赤くして、一生懸命に遊んでをる。

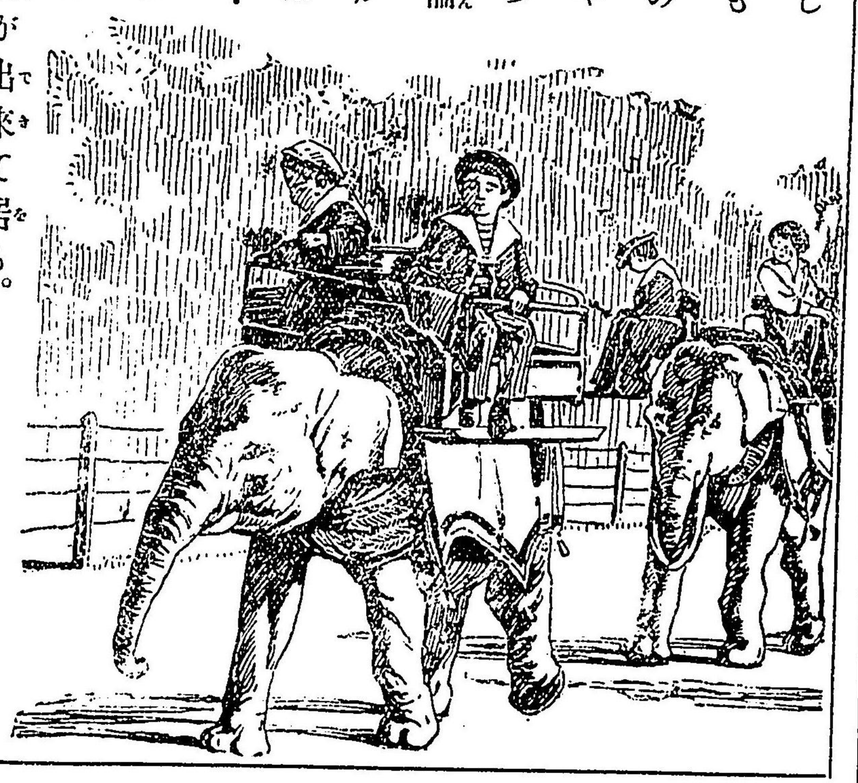
こんな風だから、ざつと見渡すと、木の下にも人、廣場にも人、道ばたにも人ばかりで、その賑やかさは、お祭のやうだ。殊に日曜日には音樂があつたり、狂言があつたりするので、一しほ混雜して、いかに廣い公園でも、人の中から草木も生え、道路も出てをるやうに思はれる。

かやうな日には、大金持の連中が、馬車や騎馬で綺羅を飾つて乘廻

はすものが多く、それを見んこて、集まり來るものも少からねば、その賑ひはまた一層である。

小さな衰へた國ではさうもゆかぬが、倫敦とか巴里とか伯林とか維納とか紐育とかいふ處の公園では、かやうに無數に集まり來る人々の服裝が、すこしも穢くない。と

いつて美麗な贅澤な風をしてをるでもない。木綿でも何でも垢のついて居ないのである。襟などの臭く履や帽子などの塵ほこりに染つて居らぬのである。最も倫敦では社會に自然の制裁があつて、紳士の歩く公園には下等な人民はあまり行かず、紳士は下等な方に立よらねば、誰云ふことなく、あの公園は上、あれは下といふ風に區別が出來て居る。



日本の今の處では家作りが、共同生活になつて居らぬから、こんな工合の公園は要らないやうだけれども、さうでない。出來る事ならば上野でも芝でも、今すこし快樂の多い處となしたく、また公園生活の味ひもすゝめて、共同の樂みを取りたいものと思ふ。

航海

山に居る獸は、海といふものを知らず、たま〳〵水に放てばすぐに死んでゐまう。海にすむ魚は、山といふことを知らず、鳥渡でも陸に上げると死んでゐまう。人ばかりは海邊に居つても、山を知り、山里に住んでも海を知り、波を蹴て大海を渉つたり、巖を踏んで高山に昇つたりするのは、言ふまでもなく、人間が獸や魚と違つて貴い處である。

この世界は海と陸と、どちらが多いかと云ふと、誰でも海の部面の方が廣いことを知つて居る。だからこゝの陸から向うの陸に行かうとするには、海をわたらねば行かれぬことが多い。そこで早くから舟といふ便利なものを發明して、自在にすきな處へ漕ぎわたるのである。亞細亞だの、亞弗利加だの、歐羅巴だの、亞米利加だのと、我々人間の住んで居る陸地は、天然自然の理合から、處々に分れてをるが、是等の間を往復して、我々人間が一体世界にどう云ふ風にして暮して居るのか、善いことがあらば互に取合ひ敎へ合ひて、面白く愉快にやつて行かうといふには、是非船の力を籍り、海にたよらねばならぬ。だから人間は生れ來ると共に航海といふ必要がある。

若し終生この海を航るといふことせぬ人は、丁度獸が山にばかり

棲んで水を知らぬのと同じ理屈になつて、まことにはや人間の靈智の大部分を自ら棄てたものと言はねばならぬ。それも大陸に生れたものは、まだしもなれども、我々の日本國の如きは、實に一つの島國である。圖を披いて御覽なさい、四面共に海に圍まれて、僅に數里を歩けば直に海に出る。何の事はない、丸で海岸に住んで居るやうなものだ。日本といふ一つの港に居るやうなものだ。日本全躰が海岸であり、日本全躰が港であるからには、我々は大陸の人間よりも、一層航海といふことに熟錬せねば、相濟まぬ譯である。だから船といふものゝ極めて不完全な時代から、我々の祖先は、相應に海上の修業を爲たものであり、今より三百年以前の昔には、支那海岸南洋諸島邊までには、屢々出かけて、軍などをさへやつたのであつた。

德川氏の治世後ずつと引込思案になつて、支那朝鮮にさへ行くことをあまりせぬやうになり、遂には內國丈の旅行も、海はいやがるやうな習慣になつたのは、あまりといへば、ちゝんでゐまい過ぎたのだ。

ゐかるに自分ばかり引込んで居つても、外の國々に住んでをる人間等が許さない、是非海ごしに交際したいだの何だのと云つて來て、遂に今のやうな萬國交通の世中となつた。すると元は帆掛だの帆舞だのとのみいつてをつた船も、蒸汽でやることになり、十、日かゝつた處も、三日でゆくといふ事に進んで來た。

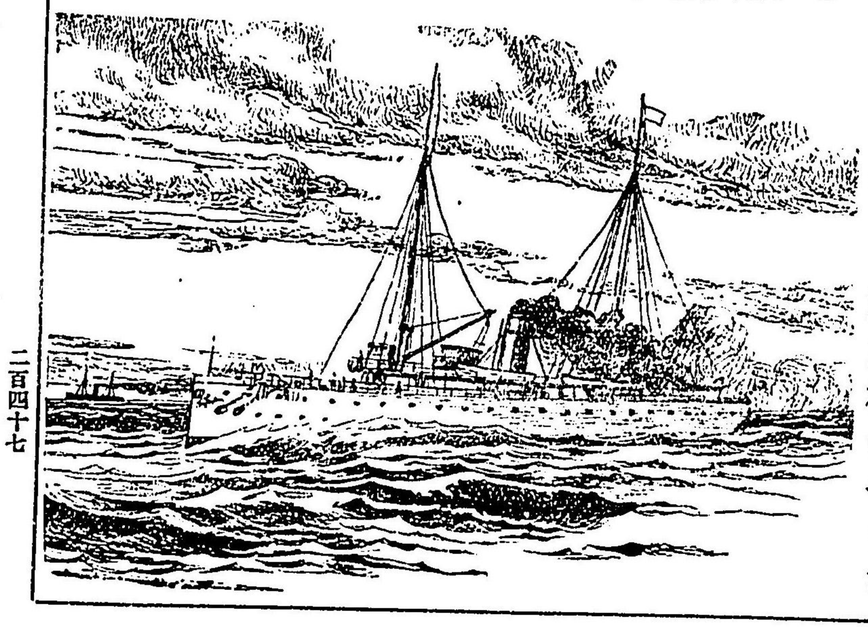
こんな樂な、こんな自由な世中になつて居るのに、船はこわいだの海はいやだのといつてをるのは、見ない芝居をきらつたり、食はない肉をいやがるのよりも、もつとをかしいわけである。なぜなれ

ば、人間は前云ふこほり、成るべく見聞を廣くして、愉快に家を成し立派に國を成し、安心して一生をおくるが目的であつて、それを爲すには、成るべく活動して、山でも海でも踏みわたるといふ氣象を養ふことが、最も必要なことである。小供の時から御隱居樣のやうに引込んでばかりをつて、譯のわからぬ乳母などに、おとなしいと言はれるのを、自慢してをるやうでは、えらい人にはなられぬ。それも航海すれば、千人に九百人までは、危險だと云ふことなら考へものだが、今は決してさうでない。千人に千人まで殆ど安全である。又最も愉快である。

神戸から出帆すると一晝夜もかゝらぬ中に、朝鮮にゆきつく。一週間も立ぬ中に支那にゆきつくといふ簡單な譯で、ぐず〳〵考へ込んでをる中には、はやく隣國にゆかれる。隣國にゆくと、我とは

全く習慣のかはつたものを見ることが出來る。神主樣のやうな風して朝鮮人は歩いてをる、豚尾を下げて支那人はいごいてをる。店の工合から、話のもやうから、丸で新らしい事ばかり、どうしても新智識を得ではをられぬ。

そこで航海中は、どうかといふと、それは〳〵おもしろい。陸上の生活と違ふのも、一つの學問で、大きな鯨がはね上つたり、こびの魚が、一里も行列して波の上を舞つて歩いたり、雲の色がさま〳〵に變つて水にう



つりたり、こても陸上では見られぬものが、そく〳〵と、目の前にあらはれて來る。殊に歐羅巴までの長航海でもしやうものなら、氣候が處々でかはるから、陸の色も波の色もさま〴〵に違つて來る。

色は待奢で、草木は眞青である。椰子だの、芭蕉だのこいふものが、のそ〳〵と生えてをつて、實がいつでもふさ〳〵と成つてをる。土人の黑ン坊は、素裸で素足でぞろ〳〵と歩いて居る。滅多に見ない鳥も飛んでをれば、名も知らぬ獸も走つてをる。その暑さは、冬でも秋でも春でも八十度より下つた事はないと云ふから、もごより女でも着物こいふほどのものは持つてをらぬ。夏の虫は氷を知らぬこいふが、こゝらの土人は大方霰もあらぬだらう。

港のさまを見ると各國の商船も浮んでをれば、軍艦も並んでをる。その間を拾錢は思はず棄てさする。中には

小蒸汽も走つてをれば、物賣船もめぐつてをる。最も面白いのは黑ン坊の子が筏のやうなものに乘つて來て、客船に向つてヤンチヤ〳〵と聲をかけて物をねだることである。この時客から壹錢でも貳錢でも海の中にほり込んでやると、その黑ン坊は丸で魚のやうに逆まく波に躍り込んで、その錢を拾つて來る。その手際が如何にも妙で不思議だから、拾錢貳はこの蒸汽の底をくゞつてこい、

そうしたら五錢やるなんと云ふと、例の魚のごとき人間だから、競つてその底をくゞりぬける。　我が江の島では蜑の子が、かやうな工合にて客に錢を貰うことがあるが、印度人はなか〳〵　江の島人などのおつゝく事でない。　彼が水くゞりの卒業生ならば、これはやつと豫備科の新入生位だらう。　殊には黑ン坊だから猶面白いこともある。　彼等は眼ばかりピカ〳〵して、全身眞黑で、白い部分こいふは、齒の外にはすこしもない。　さうしてこんな乞食のやうな奴だから、食物もろくにくはぬと見えて、体格が非常にわるい。痩せおころへて、麵包などを與へてやると、ムシヤついて打食ふ工合などが、氣味のわるいほどであつて、猿か猩々かのやうだ。　こんな珍らしいものも、海により船によらなければ見られない。山も島も鳥も見えない海の上は心細いといへばいふやうなもの

の、船員一同は、一家族のやうになつて仕舞ふから、話がはづんで、思の外に退屈せぬものである。　波より昇る月を批評したり、夕日の波に輝く工合を寫したりしてをると、おのづから氣象も壯大になつて、世界を一口に呑んだやうな心持になる。　たま〳〵　大浪がおこつて來て、船が動き出し、甲板は潮沫に浸さるゝやうになると、暈ふこともあるけれども、二三日すれば馴れてゐまつて、さほどに苦しいものでない。　かへつて波の變化が目ざましくて、愉快でたへられぬやうになるものである。　或は千軍萬馬の馳せ來るやうにも思はれ、雪の山のくづるゝごとくにも見えて、面白い中に氣象を慥にする藥にもなる。

日のあたゝかくして膚心ちよき時には、男も女も甲板に集まつて運動會を催したり、唱歌會を開いたり、おの〳〵その國々の名所の

話をしたり、夜に入りては音樂を奏したり、狂言を演じたり、社會の

俗禮を一切離るゝから、一種かはつて陸にて得がたい樂みが在る。」

讀書の好きな人は、勝手に書をひもこき、運動のすきなものは自由にはねまはる。或はカルタやトランプを玩ぶものもあれば、將棊や碁を鬪はすものもある。謠曲をうたつても、詩を吟じても、咎むるものもなければ、制する人もない。實に海は波上の大自由國にて、決してお婆さんなどの考へるやうな、恐しいものではない。況や航海には必ず目的があつて、英吉利にゆくか、佛蘭西にゆくか、支那にゆくか云ふ事だから、そこに着いてからの愉快はまた大したものである。いかに地圖ばかり見ても實際ゆつて見なければ、本當にわからぬやうに、どんなに海圖を研究しても自分で航つて見なければ、眞の味は得られない。

大陸の人間から見ると、日本國民は、悉く航海術に長じ、海を疊の上のやうにして居るやうにならなければ、いかぬと思ふ。今日英吉利が全國擧つて航海に力を用ひて、殆ど全世界の海上權は彼が一手に歸し、海上王のやうに自分も許し、人からも云はれてをるのは、その地理上から、自然さうなつたのでもあらう。我々の國は東洋に於る英國のやうな地位に在るから、彼よりも一層すゝんで、日本人は蜑だといはれてもいゝから、海と中よくなりたいものである。我が瀨戸内を航るもいやだとか、渡舟に醉つたとか云ふことを、人

前で憚からず話すやうな意氣地なしでは、到底だめだ。それは丁度いつまでも山にすんでをる獸となつて終らうといふのと同じ理屈で、今日の世界に不通な事である。文明日新を貴ぶ日本人民に最不釣合な事である。

芝居及び寄席

人間は朝から夜まで、理窟づめで、眼ばかりきらつかせて居られるものでない。天地間の氣候もさうで、嚴寒の冬空が終ると、温和な春が來て花も咲き鳥も鳴くといふやうな譯。芝居や寄席は、花や鳥のやうなもので、一年中に春が无ればならぬと同じく、人間社會には、是非にかういふものがなくてはならぬ。だからいつの世いかなる國でも、必ずそれ相應に人の心を樂しまし

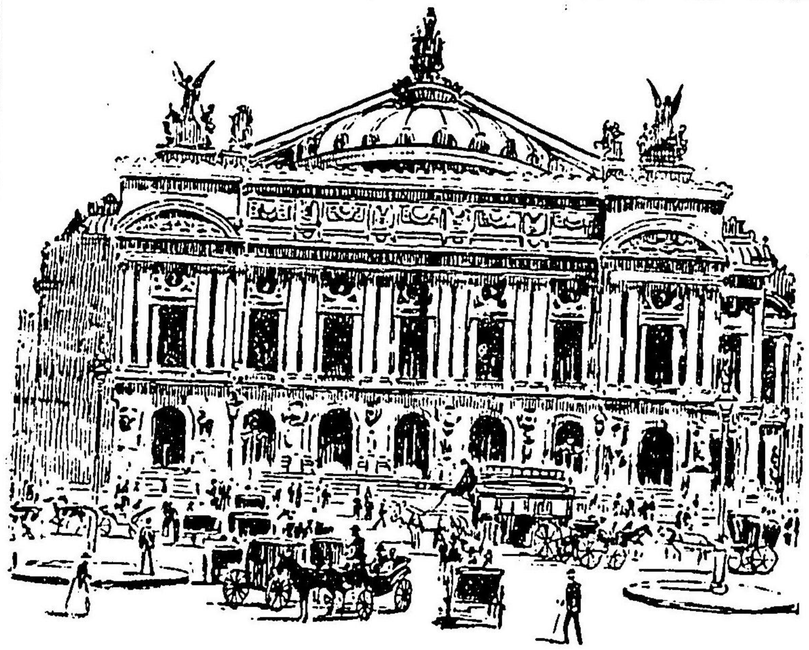
め、耳目を喜ばしめるものが无いことは无い。我が國は素より、支那でも朝鮮でも、印度でも、皆芝居寄席のやうのものがある。然るに西洋の芝居や寄席は、東洋のとは餘程相違がある。第一金も十分にかけてあるし、大体の構造も頗る宏大で、意氣込も大に異なつてをる。

まづオペラといひ、テアートルといふのが、我が國でいふ芝居で、コンセルといつて、多くの人々を集めて、さまざまの狂言や藝當をやるのが、丁度寄席にあたる。孰れも歐米各國に盛んに行はれてをる。

オペラといふは、音樂が主で、それに合せて役者が謠ふので、總てのせりふが悉く歌になつてをる。ちよつと我が能に似てをるけれども、あんなにさつぱりしたものではない。音樂は最も盛大で、舞

臺には大變な裝飾を施し、その書割などは頗る骨折つたもので、杉板に松の繪といふ譯ではない。役者は男女混淆だが、幕の都合に依つては二三百人も一幕に出ることがある。これは歐羅巴では巴里のと、維也納のとが最も壯嚴で、最も評判が宜い。またオペラコミックといふがあるが、これはやゝ嚴格を脱して、少々滑稽にわたる所作をも爲る。おかしせりふは矢張歌である。

テアートルといふは、即ち我が芝居で、世話物も演ずれば、時代物も演ずる。これも歐米ともに、まづ同じ趣で、非常な金をかけて、建築はじめ總てを飾りたてゝある。せりふは各その國語の粹で、これには音樂は交へぬ。たま〳〵交へたのもあるが、それは變則で、決して正則のテアートルには无い。俳優は矢張男女混淆で、その舞臺の拵造などは、オペラとそんな大かはりはない。



コンセルといひて、さま〳〵の藝、いろ〳〵の躍、手術、活動寫眞、動物の藝などを行ふ處は、遙に前二者よりも品格が下つてをる。おかしその建築及び内外の裝飾等は、十分に意を用ひ、金を用ひてあるから、決して見苦しい處の譯ではない。こんな處には必ず珈琲店酒舗が、半分は、その席を塞いで、勝手に飲み食ひ不規則に見ることも出來る。いはゞ遊歩がてら見物するやうな仕掛である。我が國では芝居見物と云ふと、殆

ご一日半はかゝるが、西洋では大抵午後八時から十二時までが普通で、最も日の長短にもよるが、夕食後四時間のものゝ極つてをる。晝の中に催す處もあるが、上等のには至つて稀である。だから芝居見物といつて、前晩から大騒するといふことには及ばぬ。たゞ我が國と違ふのは前にもいつたごとく、全体の仕かけで、第一芝居處の建築などは、さながら王宮のやうで、ここにオペラといつたらここの國でも最も金をかけて造つてある。ここに巴里のは十九世紀中有名な建物と呼ばれる位で、その壯大にして立派な事は、殆んご世界一だらうとおもふ。維也納や伯林のオペラも廣く大きいが、到底巴里のには及ばぬ。テアートルも巴里のが一番垢抜けのあてをるやうで、その裝飾なども美術國だけに優美に出來てをる。」おしならしてかういふものゝ建築は四階で、日本でいふ桝の處は

一人にて一椅子づゝ占めるやうになり、一階二階などいふ處は、いはゆる桟敷風にあつて、一組一組に仕切るやうになつてをる。ズーッと上は我がいはゆる立見の塲處めいて、小さな椅子がざらりと並んでをる。一体に構造が環形になつて居るから、四階などよりも舞臺を見おろすと、まるで穴の中でも、のぞくやうな工合。舞臺の書割は全体にパノラマだから、何千里の奥も見るやうなのもあり、宮殿樓閣が、本舞臺とつゞいて、その區別が分りかねるやうなのもある。ここに電氣作用が自由自在であるため、さま〴〵の色をあらはす手際といつたら、目も心も奪はれぬものはなからう。幕は我が國のやうに横に引くではない、いづれも中央から左右兩方に分れるやうになつてをるが、その工合は窓掛の大きく厚い立派なやうなものである。開時はスーッと左右に引き分け、閉ぢる

時はザワッと兩方から打合ふ。廣告や何かを書いた幕も、たまには見えるが、上等の座にはそんなものは用ひぬ。

音樂手はこと〳〵くその舞臺の下の處に席を占めてをるが、オペラの大きな座には、百人位はかゝる。この百事整頓する舞臺にあらはれ出づる男女の俳優は、その愛嬌を天下の人々にふりまくと共に、その藝能もなか〳〵上手だ。一幕了れば、必ずその重なる役者どもは手を携へて、笑をたゝへて御禮をする。その愛嬌の深さには何萬金をたゝき込んでもへこむことはあるまいと思ふ、この時觀客は一同に拍手する。拍手が止まぬ中は顏を出す習はしだから、人望のある役者などは、三度四度位は御禮せさせられることがある。

オペラ、テアートルを見るには、男は燕尾服を着、女は彼の胸をあら

はした禮服を着てゆく例である。幕の間は是等の人々は嚴格に椅子にかゝつて、用あることも高ういはず、無論烟

草も吸はず、宮殿にでも侍つてをるやうな樣子で見てをる。決して役者の批評なんかはせぬ。たゞ感に堪へぬ時は拍手のみするけれども、物は言はぬ。一幕了ると大方運動場に出る。これは矢張その建物の中で絨毯を敷き詰めた處も、又は寄木で拭ひ上げた處もある。こゝには壁畫があつたり、彫刻があつたり、鉢植が並べてあつたり、それは〳〵奇麗な事である。又この外に喫烟室もあれば、喫茶店も酒舗もあるから、好み〳〵に、そなたざまにゆくもの素より少からぬ。幕のあく前には、リーンと鈴が鳴るから、それを相圖にぞろ〳〵と自分の席にかへり、すましこんで椅子によるといふ風だ。

座内の周旋者は札賣から携物預り、筋書賣など、至り盡してをるが、女八分で男二分といふ割合。兩眼鏡は、大方その席ごとに備へつ

けてあるから、僅の金を出せば勝手に見られる。

オペラは大方毎夜その筋がかはる。最テアートルも代るのもあり、又一年位は打つゞけて居るのもある。サラベルナールといふ女優は、天下の名人といはれて、殆ど歐米全土を蹂躙して居るものだが、彼が演じた奈破翁二世の傳などは、巴里では大あたりで隨分長い間つゞいた。

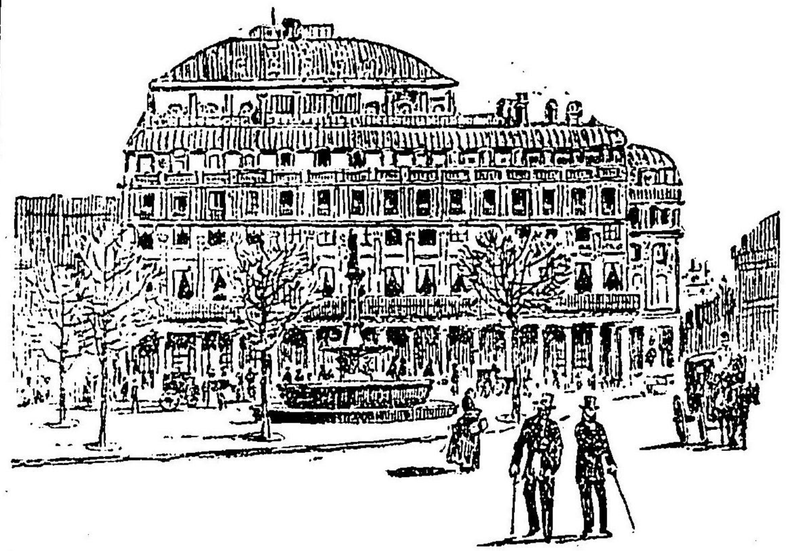
芝居の人氣ある事は、ここの國でも同じ事だが、西洋では實に豫想外のものである。佛國ではオペラ、テアートルの二三のものは、國立であつて、その開場中は常に騎兵をたゝせて番させてある。こんな座になると、役者は各その專門家ばかりで、その外の藝は一切せぬといふほどの見識なものである。素より大統領も臨むので、その席はつねに設けてある。我が舊幕時代にお能拜見といふ詞

があつたが、まづ芝居拜見といふやうなわけだ。

寄席といふがはに至つても、その仕掛はなか〳〵大きい。矢張二三階位はあつて、人間の千や二千は詰る。室内の裝置も隨分立派で、我が芝居の席などはなか〳〵おつゝかぬ。こゝは前にも云つたごとく、さま〴〵の藝づくしで遊歩がてらの場處だから、見物人も必ず正服正帽といふ譯には及ばぬ。フロックコートも、モーニングも、セビロもあるといふ鹽梅で、不斷着のまゝに入込むありさまである。素より開幕中正しく見るものは、烟草も吸はず、物も言はぬが、その運動場即ち酒舗や何かの在る處では、勝手にあやべり、自由に飲むといふ風で、いかゞはしい女なごもあまた來てをり、白粉や脇香を、すりこすつてゆく奴も頗る多い。花賣もをれば、菓子賣も徘徊するので、あまつたれたり、すねたりしてをる男女のむれ

は、そこにもこゝにもといふありさまだ。」

これ等の遊び場の種類は實に多いが、中には躍專門の處もあれば、歌專門の處もある。併し孰れも名優といふ程の者は居らぬ。たゞ變つたもの〳〵と目あたらしくするので、その趣工の面白いには、おのづから人々歩を運ぶ。動物の藝といつても、我が國ではまづ犬とか猿とか、鸚鵡とか、山がらとか、大抵極つてをるが、かしこのは實に思ひの外だ、猫も藝すれば、猩々も躍る、オットセーが



ピアノを彈いたり、獅子や虎が、おとなしくおじぎをしたり、それは〳〵さま〳〵だ。動物がこんな鹽梅だから、人間の藝こいつたら、どんな放れ業もある。又おもひもつかぬ身振りもする。歐米では、千篇一律こなつてをるが、彼の足擧げ躍なごは、我々の目には隨分おもしろく、またいかゞはしい。妙齡の婦女八九人若くは十四五人、その多きは二三十人にも上るが、打つれ揃つて躍り廻はる中に、時々その足を頭の上まで持上るのが、實に輕妙で、その持上げたまゝで、べたりこ坐する樣子なごは、能く足が裂けぬこ思ふ位だ。又薄い肉襦袢一枚で、大勢手を組み足を揃へて、跳ねまはつたりする工合こいふものは、驚かずにはをられぬ。又こんな場處は、或る時は躍り場に爲ることもあるが、そんな時には、役者ではない、その近處近邊の男女が、我も〳〵こ、駈けつけて、夜

を徹して躍る。一組の音樂隊がはやす拍子に乘つて、知るも知らぬも相懷き合ひて、躍りに躍るありさまこいつたら、實にはげしい。素より酒をも飲む、茶をも飲む、烟草も自由であれば、大聲でゐやべつてもよい。又別に素人の躍場こいふものも兼ねて設けてあつて、飛入勝手にやつてる處もある。そこには書生もゆき、兵隊もゆき、下女もゆき、職工もゆく。これ等の工合は、大分我が國こは趣が違ふ。

曲馬こいふものは、西洋は盛に行はれるが、その仕掛は、ごこの國でも非常に洪大である。中にも倫敦のこ、巴里のこは、世界に名高い。馬の五六百は出るが、その熟錬さ加減は、おごろくべきものである。こゝでは、たゞ曲馬をやるのみでない、芝居がかつた事なごも行ひ、また狂言じみたをかしみも加へる。曲馬の附きものこしては、象

や獅子や虎などの藝は、どこでも普通になつてをつて、從つて思ひきつた冒險な事もやる。だから、あやまつて嚙み殺されるやうな事も少なく无い。

巴里の萬國博覽會には、東洋各國の芝居もあつて、西洋流のきらびやかなのに引かへて、珍らしいものもあつた。埃及の火躍りなどいふは、頗る風がはりで、蠟燭の火をいくつも〳〵、頭にのせたり、腹にのせたり、手足に持つたり、口にくはへたりして、ころんであるくが、餘程古風であつた。また土耳古の腹躍といふは、鼓太鼓のはやしにつれて、二三の女が立上つて、その腹を縱横自在に、上下左右に高低せさせるが、いかにも變てこで、眞じめで見ては居られぬ。支那の芝居もあつたが、ぐじ〳〵して更に意氣が上らなかつた。日本からも川上座が出かけて、いろ〳〵演じたが、これは大分に人氣が

あつて、東洋諸國中では、一番名譽が高かつた。たゞいづこの芝居でも、男女まじりだが、我が國ばかりは女ばかりは外にはなし、たつた、さだやつこ一人で、舞臺を持ちきつたが、それの舞が、大評判の本となつた。

何事も東洋では、先進國となつて居る我が日本だから、こんな芝居や寄席のやうなものも、今一層改良して、歐米の仕組のよき處を採り、眞に美盡し、善盡し世界を壓倒するやうな事を工夫したいものである。いそがしい世の中だから、芝居などは、どうでもいゝといふ人もあらうが、さうでない。人の心を慰め、人の耳目を喜ばしめ、かつは人情風俗の如何を知り、社會をして、常に究窟にばかりあらしめざらん爲には、最も必要なもので、丁度花が咲き、鳥が囀づるやうなわけで、世中がいそがしければ、いよ〳〵その必要が生じて來

る。それについては、我が芝居座が、あまりに呑氣に、一日がけに見るやうに搬へ成し、また小さな桝の中に押し込めて、飲食せしめるやうな事は、早〳〵に改めたいものだ。寄席でも、今一工夫して、あまりに殺風景に陷つてをるのを救ひ出すことが、出來ぬでもなからうと思ふ。

巴里の花いくさ

人は勉強ばかりして居つてもいかねば、遊んでばかり居ては猶さらわるい。勉強する時にはして、あそぶ時には盛んに遊ぶがよい。遊の種類は、日本にも西洋にも、いろ〳〵あるが、成るべくば男でも女でも、ぐず〳〵せずに、活潑に愉快なのがよい。又成るべくば大勢寄り集まつてするこがよい。小さい部屋の中に入つて、將棋をさしたり、双六をしたり、石なごを取つたりするのも、悪くわるいことはいはぬが、それよりも庭に出でゝ鞠をうつか、又は船漕、凧揚げでもする方が、躰の爲にもよければ、氣もせい〳〵するのである。それも一人よりは二人、二人よりは三人、三人よりは四人五人と、成るべく數のふえる方が愉快も多く、かつは親睦の本にもなる。だから學校の運動會や、友達同衆の戸外の遊びは、小供にとつては、最もよき遊びかたである。

佛蘭西の巴里といふは、西洋中の最もよい都で、樂みの多い處だが、毎年二月の中旬に、カルナバルの祭といふことがある。この時には小供は勿論、立派な官員でも、年老いた學者でも、大金持でも、議員でも、軍人でも、教員でも、學生でも、下婢でも、下僕でも、乳母でも、番頭でも、小僧でも、丁稚でも、御者でも、馬丁でも、乞食でも、實に男女の區

別なく、我も〳〵と浮かれ出すのである。

このお祭には、どんな事があるかといふに、日本のごとく別に神佛を祀るわけでもなければ、殊に儀式立ちたることのあるでもない。たゞ大通り小通りの區別なく、市街に出でゝ、知るも知らぬも、コンフェッチーと云ふものを、互にうちかけ合うて、笑ひ興じて樂しむまでの事である。

そのコンフェッチーとは、どんなものかといふに、赤、紫、黄、青、白などの紙を、丸く小さく小指の爪ほどに切りたるもので、それを攫んで投げ合ふのだ。これは洋服のかくしに、押入れておいて、かづ〳〵攫み出して、投ぐるものもあれば、茶袋のやうなものに、一斤も二斤も入れて、左の手で之をかゝへ、右の手でつかみ出して、投るものもある。その小紙の色が右云ふごとく、紫だの赤だの黄だのと、さま

〳〵で、投げ合ふ人が多いから、花のやうに散るので、余が花のいくさと名づけたのである。

この日は、また別に幅二分ばかり、長さ三十間餘もある五色の紙を、高い窓から千筋も二千筋も垂らしたり、往來の並木にふさのごとくに掛けたりする。これは丁度我國の七夕棹の一層美しいもので、錦の瀑でもおちてるやうに見える。

この御祭騒動は當日一日の筈なれども、その前々日位から、そろそろ初めかける。巴里は、どこでも淺草の仲見世通りのやうに、そろ〳〵と人が歩いてをるが、その中で一番賑かな處が、ブールバールデジタリヤンといふ大通りで、一番道幅の廣い奇麗な處が、シャンゼリゼーといふ大通りである。だからこのさわぎも、この邊が最も中心になつて、全巴里市に波及する。

朝から午後の四時頃までは、お孃さん連だの、紳士連だのといふ上品の方の人の爭が多い。それから段々と日か暮れかゝつて、遂に夜に入り、愈々おそくなると共に、職人や何かゝ多くなつては、最も盛んに、最も非常に騒ぐのである。

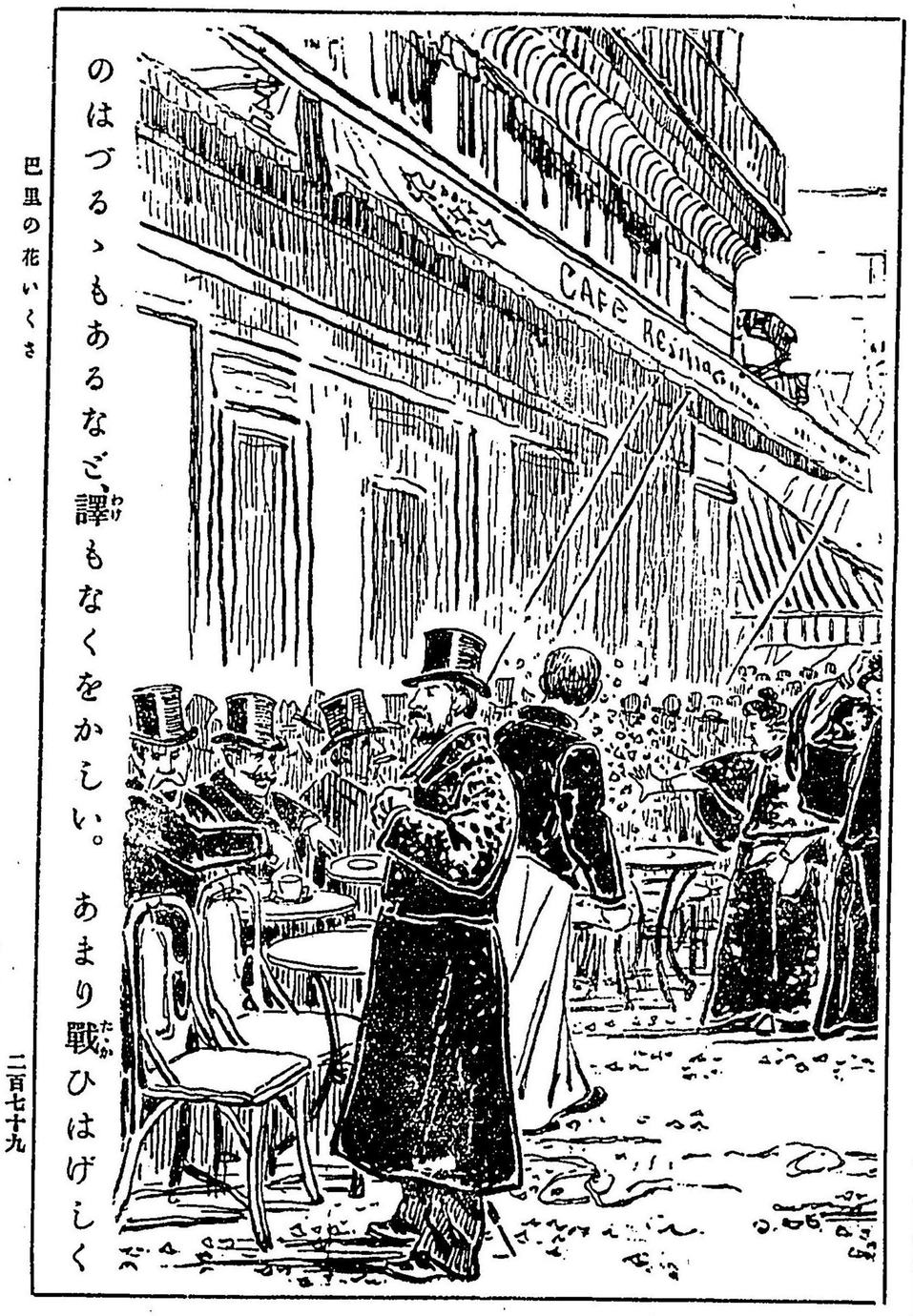
晝の間は柔かなる風はふく、日はあたゝかに照るといふ道のほとりに、殆ど掛小屋でもしたやうに、ズーッと並び陣して、彼のコンフエッチーの袋を、荷車や馬車などに積んで賣つて居る。その袋は紙もあれば、薄い布もある。或は、大なる箱に山のやうに積みかさねて、桝にて量りながら賣るものもある。大抵一袋は佛貨五十サンチームで、桝で量つて、おいそらと洋服のポッケットなどに入れてくれるのは、十サンチーム位。（十サンチームは日本の錢で四錢内外に當れども、向ふの相場でいふと丁度我が壹錢位にあたる。）

是を通りかゝりの人々が勝手に買つて、やたらに投げかける。小さい兒などが、大きな男などを追かけて、打かくるに、素より屆くべくもあらねば、そが腰あたりにかけて遁げんとするを、おとなは笑ひ顔にふりかへつて、その小兒の帽子のうへより、袋の口とく〳〵打ちかくれば、その兒は、さながら紅葉の錦を着たやうになつて、走り來るなどは、よほど愛嬌がある。新夫婦などゝも見ゆる連中が、嬉しげに手ひき合ひてゆくを、傍より、つと立出でゝ、それらが帽子肩掛などを埋るゝばかりにふりかくれば、あらとおどろき叫びながら、負けじと追つきて復讐するなども、一種かはつた見ものである。

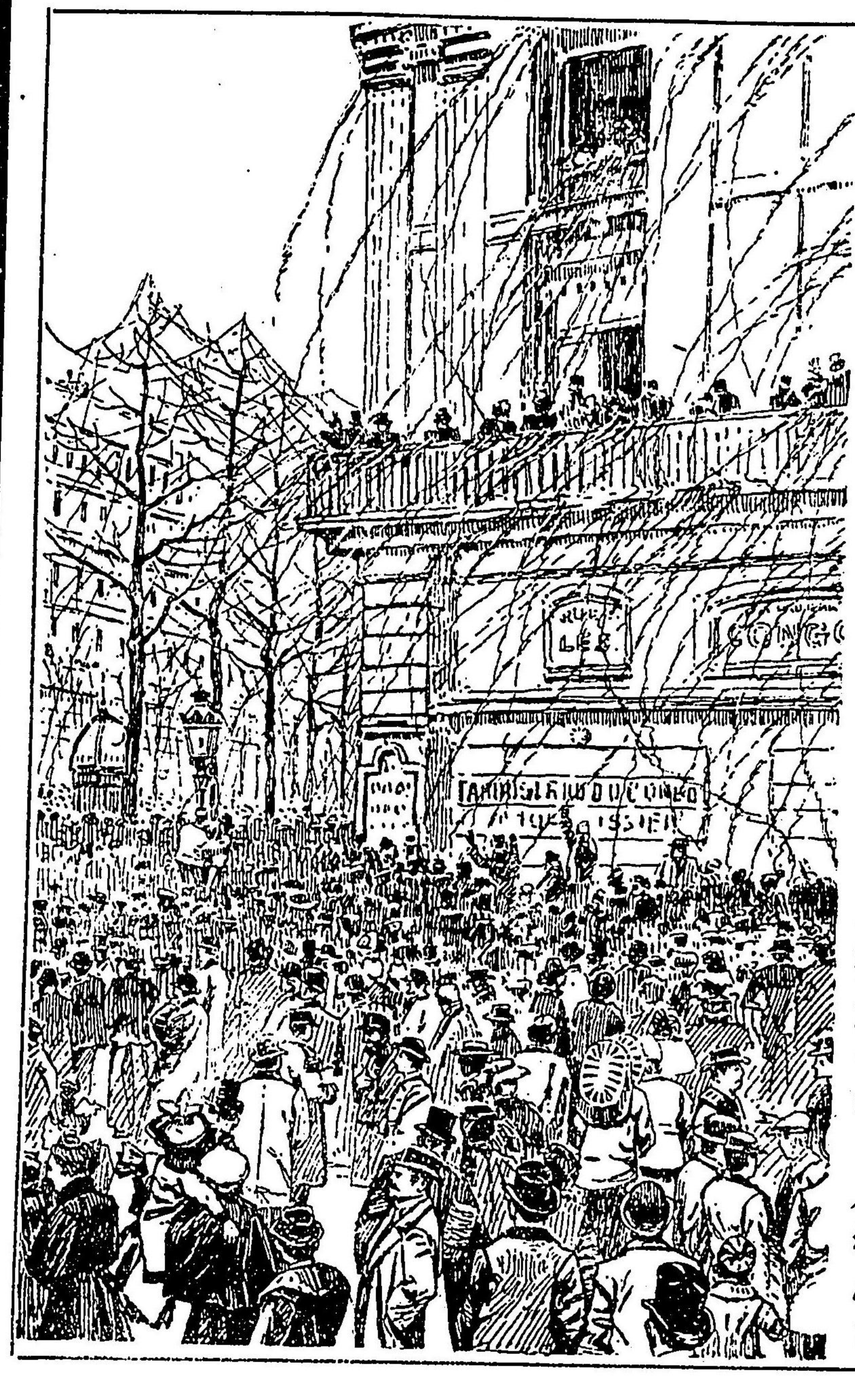
又女學生の一むれなどが、「今日」はなど高聲に呼ばりつゝ、すましかへれる紳士連を目がけて、前後左右より攻擊するを、鼻毛長の若ものども、こゝのがさじと、兩のポッケットに手早くさし入れつ

かみ出して、散々に戦ふに、果ては高帽子がおちるもあれは、眼がね

のはづるゝもあるなど、譯もなくをかしい。あまり戰ひはげしく



なれば、肩のあたり捕へて、三つかみ四つかみ、襟元におし入れんと



し、入れさせじと爭ふなど、眞にやさしい、小供つぽい戰ひである。この日は滑稽なる風すること、をさへ許しあれば、紙鼻の一尺ばかりの天狗流の物をつけたるもあれば、おばけ、般若の面などをかぶる者もある。或は突然人の前に立ちて、プーウと紙製の喇叭を吹きたてゝ、おどろかすもあり、萬歳々々など唱へながら、五色の紙にてつくれる塵拂やうのもので、人の面を撫でゆくものもある。大方は、彼のコンフエッチー投合ふ時は「今日」はと云ひながらうちつくれば、「難有」と返事しながら打かへす、といふ風だ。そうして男は女にむかひ、女は男にむかつて戰ふのが、自然になつてをる。それもあまりくどくなると、喧嘩じみたることも、なしともいはれねば、大抵三度か四度位にて、双方で引わかれる習はしである。又戰の數が盛んであるから、さばかり廣き道路も、悉くこの小紙に埋まり、

彼の大通りなどは、一尺餘もつもりて、丁度落葉の上をゆくやうになるが、決して道におちたるもの、即一度投げすてたるものを、再び拾ひ上げ、つかみとつて打合ふことはせぬ。若しこの習慣に背くものがあつた時には、誰彼となく來て之をいましめ、又は大勢たかつて侮辱するのである。こんな妙な制裁が自然と行わたつてをるから、想像したよりも混雑しない。醉つぱらいなどは、一切出かけることは成らぬ。人をおしのけつゝ、臂張つてゆく奴だの、喧嘩面して、大道せばしと振まふものなどは、一人もをらぬ。だから人は蛆のやうに動き、蟻のやうに歩いてをるけれども、危險な事は少ない。老人も小供も十分によろこびを盡して、このむれにまじるを、更にあぶないともおもはぬ。最も日がくれゆくと共に、やゝ亂暴になり、ふざけ半分の組打やうの事をするものも見ゆれども、決

して喧嘩はせぬ。

全く夜になると、例の瓦斯電燈などが、大陽の代りにかゝやく。こんどは晝よりも、やゝ下品なものが多くなる、併し上品の人も素より出ないではない。

コンフェッチー——買ひ玉へ、價は五十サンチーム

などの聲は、殆ど耳もわれるやうに、こゝかしこに叫んで居る。例のごとく打合ふこと盛なれば、一袋二袋は瞬くひまに投げ盡くす。だから中には大な頭陀嚢のやうなものを頸からかけて、一升も二升も、小紙を入れて、滅法やたらに投げ合ふものもある。素より無意識に前後左右に振りかくる愛嬌ものもあれば、彼の男の面をや打たん、彼の女の鼻をや打たんとねらひをつけて、おしよするものもある。更やゝふけて戰酣になれば、襟上つかんで無理におし入れんとするものもあれば、知らぬかほして、跡より肩をたゝき、

ふりかへる面見かけて、投げつくるもある。或は物言ふ人をたづねて、その口に打込みてにぐれば、おのれ何んだと、おつかけざまに、あらん限りの囊ながら、投げつくるもある。

市街到る處に、珈琲店ありて、そは日本と違つて、道ばたに數千の椅子を並べ、通りを見ながら、麥酒や珈琲を飲む習ひなるが、今日は戰の爲に、それらの珈琲店は、殆ど五色の小紙が舞うて居る。だからそんな處に休んでる人は、コップの上には、必ずふたして、このコンフェッチーをふせいでをるが、テーブルも一ぱいに投げかけらるれば、なか〳〵ふたした位ではおつゝかぬ。彼等は人の見ぬ間をぬすんで、グーッと飲むを、早く見てとりて、投げかくれば、酒は小紙に埋れて、おぢやんになるもおもしろい。若し戰爭の中を、馬車が通ることあれば、前後左右より押しかけて、その窓を明け一升も二

升も投げ入れ、萬歳となへて笑ひゆく。かゝる場合には中の客も素よりさるもの、必ず用意の袋より取り出して負けじと爭そふ。七八階の高き處より、大なる籠に、彼の小紙を入れて、下通る人の頭の上にふりかくるのが、電燈の光にかゞやいて、その奇麗なことは丸で五色の雪でも降るやうである。こんな事をするのは、大方はお孃さんたちのいたづらか、下女の飛上りものだが、その小紙の中には、菓子などをまぜて、おとすことも多い。この日は大通り小通り處でない、どこでも戰爭するに、場處を撰ばねば、用ありげに人を訪問して、出て來るを待つて打かけて笑ふもあり、彼の小紙を用意しながら、そつと食堂に出でゝ、パッと散らして興を添ふるものもある。兩親と子供と、姉妹と兄弟と、朋友と朋友と、知らぬと知ると、この日ばかりは、このコンフェッチーの爲に、一層の親しみを增す

こゝ、いかばかりか知らぬ。 されば鼻の穴、耳の穴は更にもいはず臍のあわまで、コンフエッチーのくゞらぬ隈は无い。 殊に女の髪などには、能くひつ付くから、三日や四日では、悉く取除くことは六かしいであらう。 余もこの戦に臨んで、隨分働いたが、翌日湯に入つて見たらば、汗に五色の紙が染みついて、躰は悉く彩色せられ、湯の水は畫の具を流したやうになつた。 そこで大方の巴里人は、大抵この日は、五色に染められただらうと思ひやつた。

こんな事が、この祭の仕方で、外に珍らしいこともないが、その愉快といふものは、貴賤上下におしわたつて、容易に得られぬ事である。 之を彼の一室に籠つて、一人や二人で遊ぶ事に比べたらどうであらう。 萬民共同に樂しむといふ風俗は、羨しいほどである。 世界的になりゆく日本だから、遊びでも昔流義の事ばかりでもいくまい。 付てはこのカルナバルなどは、餘程面白い趣工で、參考になる遊びかたゞらうとおもふ。

この祭日は、もと希臘におこつて、それから羅馬に來て、初めは佛蘭西の南方にうつり來たが、五六年このかた巴里には行はるゝやうになつたといふことである。 むかしは麵包粉だの、菓子だのといふを投げつけて、彼の塵拂で、人の肩を撫でる位であつたが、菓子や何かでは、衣服がよごれたり、又傷つく恐もあつたから、このコンフエッチーにかへたこの事です。

祭がすんで翌朝見ると、山のごとくにつもつた、道路の紙片は、奇麗に掃除してあまい、木にかけてあつた長紙も、皆とりのけてあつて、その速かさは、實におどろく程である。 そうなると、決して人にむかつて、昨夜のごとく投げつくることも出來ねば、ふりかけやうと

も思はぬ。此に至つて昨日の事は一夜の夢のやうで、丁度大風のふいた跡か、夕立のはれた後のやうな工合。

又五月になると、ミカレームの祭がある。これは巴里中の洗濯業をしてをるものゝが主になつて、遊ぶので、當日は最も美人で最も品行のいゝ洗濯女を投票して、女王とするのである。その女王は女王車を造つて、それに乘せ、一大行列をして市中を練り歩くのである。この時は最も滑稽に裝ひ立てるので、ヒヨツトコでもおかめでも、天狗でも考へ次第に、こしらへたてゝ、馬車に乘たり歩行したりしてゆく。この行列中にも、彼のコンフエツチーといふ紙片を投げかけて興じ合ふので、その騒ぎは、カルナバルの時こすこしも替はない。

この女王に撰まれた人には、大統領より腕輪だの指輪だのを贈る

ことなどがあつて、非常な名譽を博する事である。だからその競爭も頗る勵しい。

平生はさつさと勉强して、血眼で走り歩く人民だから、時々はこんなおもしろい事がなくては、氣も塞ぐであらう。丁度日本で花見時には上下擧つてうかれ出るやうなわけで、社會といふものは理窟や議論づめばかりではいかぬことは、世界萬國同じわけのものと見える。

さうすれば同じ遊びでも、部屋籠城のトランプや双六などより、こんな活潑な共同的な事にしたいものとおもふ。

西洋の商店

我が國流の開放商店は、世界中稀に見る處で、一たび汽船に乘つて、

支那の地に上ると、直に光景が一變する。それから西洋にいつて見ると、支那とはそんなに大がはりはない。大躰の店が、通りから、すぐに手を出して取れるやうな仕掛は、我が國ばかりだ。あちらのは、いづれも戸をおしひらいて、奥へゆかなければ、買へないやうな事にしてある。

就てはそれら商店の重なるものについて、參考のためにすこしばかりその模樣をいつて見やう。

裁縫店及び反物店。裁縫店と反物店とは、大体は兼帶だが、さうでないのもある。先づ裁縫店は、どんな工合かといふに、我が洋服店と似ては居るが、その店の飾り付けなどは、大したものである。たとへば、その店先には、蠟人形で、男女の姿を、いくつも〳〵こしらへて、それにさま〴〵な服を着せて、看板にしてをる處もあるが、その

やりかたは男ならば燕尾服フロックコートを初として、モーニング、ジヤケツいろ〳〵な仕立方やがらのいゝのを着せてたゝせ、女ならば同じく禮服から不斷着に至るまで、これは最も奇麗に着かざらせてある。中には機械にて、その人形のぐる〳〵ひとりで廻はりて、表裏横合などの格好のよく見えるやうにしたのもあれば、息をついでをるものもある。是等はいづれも人間ほどに出來てをるから、初の間は生人形の見せ物かと思ふ位である。

かういふ風に店先に、人目をひくやうなものをかざりたてゝ、その間々に、色々な仕立おろしの服を並べて、同じく胴にきせてたゝせてある。その價を一々正札付にしてある。さうして是等は、こと〳〵く大玻璃戸の中にあるから、すこしも塵埃などに汚される患はない。

買はふと思ふ時には、戸をおしひらいて中に入り、受付のものに、その旨をいへば、出來合望みならば、直に奥に連れていつて、身躰の寸法を取り、それに適するものを持つて來てあてがふので、若し過不足がある時は、裁縫を直してくれる。　又誂へならば、無論日本と同じくその身の寸法を、こまかにとるのであるが、店によつては、寸法をとつた上では、ゴムにてその人の身躰通りのものをつくり、それを職人のもとにおいて、裁縫する所もあるのです。　これなどは假縫ひの時に、往復するやうな手數も省けて、頗る双方便利なものであります。

又我がいはゆる呉服屋は、その反物の最もかはれるものを、店先に旗のやうにひろげて、人目をひくやうにしてあります。（素より玻璃戸の中に）これも女子用の反物などは、きらびやかだから、往來から目につくこと夥しい。　最大きな店のは、玻璃戸の一丈以上もあつて、その中に絨緞を敷いて、彼の切を衣架用のものにかけて、並べてあります。

又下着襟及び襟飾手袋蝙蝠傘等のごときも、それ〳〵に飾りつけて、玻璃戸の中に整列せさせてある。　襟飾などは、殊に目立つやうに數千百種花のごとく取よそつて、飾つたり、又は戸にひたりとつけて、透間も无く取りつけた處などもある。　是等も大抵は正札付が多い。

花屋及び菓子店。　市中を歩いて最も目につくものは花屋です。我が花屋は一向に飾り立てず冷淡だが、西洋のは、その花の咲いてをる處よりも美にしてあるやうだ。　一枚がらすの一二丈もあらうごいふ戸の中に、その時々の花を鉢（大方素燒で麥藁などでつゝ

んである。）に植ゑて、高き低き卓の上において、並べた工合は、美しいことも何ともいへぬ。或はその花の色を一層はえさせやうといふので、リボンの赤や紫や白や何かで、花の本もしくは末、あるはその花ふさの處などを、大きくふさ〳〵と結んであるなどは、その手際のよさ、いひやうもない。我が國より輸出した、つゝじ、葉蘭、菊なども、この方法で飾りたてゝあります。

これも買はふとおもふ人は、戸の中に入り、その主に、ことのよしをいつて手數をするのです。素より切花も、この處にあれば、胸のあたりなどに挿す花ぶさも、こゝでこしらへてくれる。ズーッと入つて、この服に薔薇を一輪さしてくれといへば、賣主は、かしこまつて、その服色さては顔色に適當した色の花ふさを小さくつくつて、さしてくれるのです。（西洋では胸のあたりに、花を挿みゆくこと

男も女も頗る流行します。）

菓子店は、同じく戸の中だが、大かたは玻璃の棚が、幾段も構へてあつて、そこに種々の菓子が行儀よく並んでをります。（素より往來より能く見えて奇麗です。）この菓子屋が、我が國と違ふのは、菓子屋の中には、必ずいくつも卓子椅子を並べてあつて、こゝで腰かけてゆる〳〵食うていくことの出來るやうにしてある事です。茶もくれゝば、乳もくれる。望み次第です。だから菓子好連は、時々こゝに入つて、ゆつくり菓子を食うて遊ぶのです。西洋でも比較的女子の方が、菓子好が多いやうで、すこし名高い店には、大方女づれの客が數十組入つてをらぬ處は稀れである。これ丁度東京などで、たれもかれも、一寸蕎麥屋に立入るやうな譯で、平氣な事になつてをる。その菓子をくふには、自分でその棚の上のを、これ〳〵

と指圖すれば、賣子が直に小皿に盛り小匕をそへて持つて來ます。食うて了つて後、自分はいくら〳〵食つたといふと、それではいくらですと向ふでいふから、その時錢を出し拂つてゆくのですが、數百の客人にすこしも間違の无いのは、感心なことゝおもはれます。」

水引をかけたり、熨斗を付けたりすることは、決して无いけれども、その進物にする菓子箱などは、それは〳〵奇麗なもので、明き箱ばかり飾つておいても、小美術館が出來るやうである。これには木もあり紙もあり切れもあるやうです。ここにクリスマスのおくりものゝ菓子箱などは、意匠圖案、いづれも整つて、買ひたくてたまらぬやうになるのである。

時計金銀寶石店、及び文房遊戯店。

でも、歩きながら、目を射るやうに感ぜられるは、時計及び金銀寶石

店で、暗の夜も光るやうに思はれる。是等は大方玻璃張の中なるは云ふまでも无いが、玻璃の棚が、幾段も々々もあるのに、金銀時計鎖り又は指環、その他釦の種類、また傘杖などの握り、及び時計の附屬品など、さま〳〵の色を取合せて飾りならべられてある。人造金剛石の物などもあるけれども、中には眞物の目もかゞやくやうなのもあつて、一の指環一つの時計で、何千圓と價せられるものもある。

東京の銀座通りなどに、これらの店に眞似たやうなものも見えるが、どれも〳〵おつゝかぬのは、國の貧富の度合が違ふので致し方がない。

文房具店には、筆紙墨を初めて、惣て机邊入用の物が並べてあるが、これも玻璃棚或は長棚の玻璃の蓋あるものゝ中に入れてあるが、金銀寶石をちりばめた、極めて高價のものより、安物に至るまで、能

く整頓してをる。インキ壺やペンなどには、實にすばらしい立派なのがある。寫眞挾、葉書挾、机上用暦なども、大方こんな店にある。「遊戯店は、大方は贅澤品だが、それは〳〵おもしろい物が多い。從つて隨分高い。或る日本人が巴里のオ・モチヤ屋にいつて、蒸汽船を買ふつもりで、店ざらしのものを聞いたら、案外に安すかつたから、思ひきつて飛切のものを買つて土産にしやうと思ひ、極上等を注文したら、只今は三千法以上のものは生憎品ぎれで、後ほどまでに取りよせておきますといつたのに、大におごろいてかへつた話が殘つてをります。人形などは、實に可愛らしく出來てをるが、是はとおもふほどのものは、千法以下のはない。こんなものがズン〳〵賣れると見えて、いづくの店にも人が充滿して、店員はなか〳〵忙がしさうだ。

書肆及び骨董店。書肆は教科書の出版を專門にするもので、各學科にわかれて賣捌くものである。各學科とは、文科、理科、法科、醫科、農科などいふので、おの〳〵その專門の書物を、出版發賣するのである。又古書のみを賣捌く店がある。いづれもその店の目錄あつて、時々之を諸方に配りやるのです。勿論これには價もついてをれば、解題のついてをるのもある。だから郵便でも電話でもいつてやれば、直にその日に屆けてくれる。教科書店などは、そのやりかたは非常な大仕掛で、入つて見ると讀本は讀本、地圖は地圖といふやうに、ナヤーンと書棚を分類して、一目の下に客にわからせるやうにしてある。中央にはいくつも、椅子卓子を設けて、客が自由に休み得るやうにしてある。音樂器械などは、それを運轉して見せることもあるから、頗る賑かである。又是等の大店は所々に

必ず支店があつて(各學校の最寄に)輙く小供にも買へるやうにして居る。すこし大きな店になると、何の店たるを問はず受付と、品物を受取る處と、金を拂ふ處とは、皆違つて居るから、買はふとする客を、あちらにゆかせられたり、こちらに向せられたりする。大通りでも小通りでも、賑かな處では、書肆兼繪草子店雜誌店は、我が國にあると同じ事であるが、そこらにも必ず精細な目錄は備はつて、ボンヤリ立つて見てをると、店員が「これを上げませう」といつて、必ずそれをくれる。何にしても客を引くことは、頗る上手にあかけてある。又古書店には、何といふ種類と極まつてはをらぬその目錄に分類して示してあるから、割合にさがし安い。之について感心するのは、巴里のセーヌ川の岸にある露店の古書畫で川ふちの石の欄干の上に、小さい箱をおいて、その中に種々の書を入れて出してあるのが、數丁つゞいてをるのです。素より正札付で、頗る廉價である。是等はろくに番人もをらぬけれども、盗む奴もないと見える。

信用のあることは、歐洲の一般で、最もわれ〳〵の感心することであるが、かういふ露店でも、千法や二千法の買物して、その時金をわたして、いつ頃届けてくれといつておけば、必ず時間通りにとゞけてくれる。又番人の居らぬ時には、正札通りの金をその箱に入れて、その本をだまつて持つていく人もあるやうすだが、更に間違ひはおこらぬ。

骨董店は、隨分到る處ごとに多い。日本支那の諸品も少くない。殊に東洋の古代美術品は、世界中に玩ばれてをるから、骨董店の中には、我が國などよりも、なか〳〵良い物があります。金銀細工の

工藝品、陶漆器、古代錦繪など、日本のは最も評判がいゝ。我が國がある方面から美術國のやうにおもはれてをるのは、古人の力も大に加勢してをる事です。

店の種類は、こても談しきれるわけのものではないが、右のやうにいづれの店でも、玻璃張の中に、整然とその物品が並べ飾つてあるので、(店飾りのみを專門とするものがあつて、一度いくらと報酬をこつて飾り並べにゆき、それを職業としてをる美術家があるこいふ事です。)買はふとおもふ人は、先づ玻璃ごしに、見當をつけおいて、戸を開いて中に入り、談判する事になつてをるのです。履ごかは帽子とか手袋とかいひますと、直に奥に誘うて、一通り試みさせます。杖なども長ければ、直にその客の好みによつて何寸か切りすて、傘なども客の需によつて、張りかへも、柄のはめかへもします。

是等諸店の競賣所が、即ち勸工場で、一たびそこに入れば、目もまはるやうである。殊に我が勸工場と違ふのは、三階以上もあつて、大方は廣い四角な處に、いくつも〳〵人間の胸位の高さの店棚が出來てをるので、東京のごとく兩手をふれば、兩方の品に障るやうな一筋道をぐる〳〵廻はりながら見るやうにはなつてをらぬ。だから鳥渡見ると、大廣場に共同でやつてをるやうで、買ふ人も背合せになつたり、横合せになつたりしてをるので、頗る賑かに思はれる。こんな處は、會計係は處々に構へてをつて、賣買の約がすめば、その賣人より書付けをくれる。それをもつて會計にいつて拂ふやうになつてをる。素より掛買は自由で、錢を拂つて、品物は跡から屆けさせることも隨意である。此に注意すべき事は、西洋では釣錢をくれるのに、必ず數の少ない

方から出して、遂に大に及ぼすので、我が習慣とは全く反對である事がある、例へば二圓二十五錢の品をかふに五圓を出して釣を求れば、必ず先づ五錢を出し七十錢を出し二圓を出すといふやうなやりかたである。だから日本人は一寸とまごつくやうな場合がないともいへぬ。

肉店は鐵柵の中に、豚や牛の血腥きをそのまゝにぶら下げてある。ことは我と一般で、魚店は必ず氷詰になつてをる。八百屋はその幾部分を玻璃の中に並べてあるが、大方はそのまゝに抛げ出してあること、我が俗と大差はない、たゞ奇なのは大根でも人參でも、その葉は、丸で用ひぬので、買ひにいくと悉くそこを切りすてゝくれる。何だか惜しいものと思ふが、向うでは食ふべきものとしてをらぬやうだ。

湯屋及ひ散髪店。湯屋は日本風とは全然違つて居る。だから初洋行の人には、湯屋の失策談は頗る多い。これは必ず一度はやることになつて居るやうなあんばい。なぜかといふに、日本の洗湯のやうに、大勢一同に入るでもないが、あんな大きな湯壺でもなく、あんな廣い流し場も无い。先づ湯にゆくには、その看板ある家に至り、戸をおし開いて入りゆけば直に受付がある。そこにて入湯料を拂ひ、切符を得て奥へすゝみゆく、すると湯男があつて、客の持參の切符を證據に、湯室に案内する、湯室は大抵一つの湯屋に百以上もある。素より二階にも三階にもある。一室一人專有で、その戸に鍵をおろすやうになつて居るから、決して他の人の出入は出來ぬ。その湯壺は船形になつてをつて、極良いのは大理石、又普通なのは鍍板である。その室には長椅子短椅子に小卓子あり、又鏡

臺がある。一面に絨毯若くは段通やうの物を敷詰めてある。こんな譯だから、日本流に身躰を洗つて後入るなどいふことは出來ぬ。いきなり湯船の中に飛び入るので、そこで顔でも足でも、ごり〳〵と洗ふのです。水と湯とは、栓があつてひねれば、獨で出るやうになつてをり、又天井から落るやうに仕掛けてある處もある。いゝ湯船には、必ず木綿の白切を敷きて、その上から入るやうにしてある。又、三助を賴めば、直に來てヘチマの皮の手袋にシャボンを澤山握んで、手でも足でもごし〳〵と洗つてくれる。上つてからは浴衣を着て、その長椅子の上に暫し臥して休むのだ。このやうな仕掛であるから、日本流に湯をはねちらしたりすると、敷詰めてある絨毯をぬらすやうなこともおこつて、甚不体裁になる。又誤つて栓をとめそこないでもしやうものなら、ごん〳〵と湯でも

水でも迸しり出でゝ、そこら中が大水となるのである。湯室は廣い處が、六疊敷位であれば、隨分湯氣が立つて夏などは暑いけれども、戸を開けることはならぬ。故に上つて汗だら〳〵で、直に洋服をきねばならぬ場合も少くない。これいかなる事あつても、浴衣がけでは戸外に出ることのならぬ習慣であるからです。こんな譯だから湯にいくのも面倒で、湯屋の方でも隨分手間がかかる。從つて入浴料も一回壹圓以上も要する。だから西洋人は容易に湯に入らぬ。一ケ月に一二度入浴するものは、餘程湯ずきの方である。

散髮店は、日本のと大差はない。只一口にいへば彼は諸事清潔で規則立つて居る。但し一人毎に白布(客に着せるもの)を取換えることは、我が國の一般に未だ行はれない。髯をそるにシャポンを

こて〳〵ぬつて、その上から剪刀をあてること、又髪を、刈る前に白粉で頭中眞白にして挾刀をあてるやうのことは、一寸我が風と違つてをる。その鼻の穴や耳の孔の毛をそらぬことは、誰も知てるやうだ。東京にも近來高等理髪店などがあつて、隨分心持のいゝのがあるが、向ふでは惣て清潔なのは、まことにすが〳〵しい。又あちらでは髪ばかりかりこんで、髯をそらぬ人があり、兩方ともやつても、洗はぬ人もあるやうだが、これは經濟上からも來るであらう。大抵巴里あたりで、普通の刈込料は壹圓二三十錢の相場である。

女の髪結床も、大抵男子と同じ家で、別室になつてをるのが多い。無論入口も別々で、その旨を書いてある。彼の白赤の捻棒は、こちらと同じやうにあちらでもたてゝある。

美術骨董店の中には、實に珍らしい物が多いが、我が國のいはゆる引札廣告びらの類は、大方まこめて賣捌いてをるが、なか〳〵見事なものがある。全体我が國では、文字でも畫でも廣告看板の流は、一種違つて、眞の書家や畫師からは、輕蔑せられてをる。又美術として珍重する丈の價の物が少いが、西洋ではさうでない。立派な肩書のある人の筆になつたのが多いから、實に手本としてもいゝものが澤山ある。一体廣告看板は、多くの人に見せて、その心を引くを主とするものであれば、精神こめて圖案や格好などは、考へねばならず、成るべく上手にかゝせるのが當然のやうに思ふけれども、我が國では全く別なものとして、否俗なものとして取のけてあるやうだ。世界相手に店でも張らうといふものは、是等の事は、能く熟考して貰ひたい事とおもひます。

前にも言つたやうに、商店と共に件はねばならぬものは信用こいふことで、一時遁れや一時もうけをしやうと思つて、不正品と知りながら賣つたり、約束を違へたりするやうなことでは、決して永遠に商店の繁盛を致すことは出來ませぬ。輸出品だからつて、茶の中に柴を交ぜたりするやうな淺はかな考へでももつたら、それぎり信用を失ひます。成るべく正直に嚴格に約束等を誤らぬやうに注意せねばならぬ。商畧こいふことは、不正な分子があつてはいかぬ。歐羅巴の商人の信用こいふものは、いつもいふごとく大したもので、一たび信用を失つて、不都合な人間となり、いはゆる暖簾を汚がすやうな事になつたら、こても十年や二十年で、同じ地でこりかへすことは出來ぬのです。だから朝に倒れ夕に起きるこいふやうな輕薄な商人は、倫敦や巴里などの大市には住はれぬの

である。

物品に掛値をいふことは、西洋にはあまり无い。けれども土耳古人やナユニース人は之をいふのを當りまへと心得てをる。支那人もさうである。これは時も費へ、かつ物品の信用に關することで、あまり好ましからぬ風俗こおもふ。我が國にも隨分掛値は流行だが、こんな事も將來は改むべきもの、一つこおもはれる。掛値こいふことは、店の信用に關係し、双方の品格に關し、物品そのものまでも、それが爲めに厭氣がさす事がある。極端な例であるが、緣日の商人から甲の人は一本の花を拾錢で買ひ、乙の人は拾五錢で買ふ。並べて見ると、その花にすこしも優劣は无い。こんな場合に甲の人は買上手こいはれ、乙に賣つたのは賣上手こいはれる。習慣だからそんなにあやしまぬが、ごこに信用の存するか、すこし

も分らぬ。改めざるべからざるはかゝる弊である。

西洋では店によつては、請取證さへおこさぬ處がある。ある人が銀行に一時預けを賴んで、請取をこいつたら、こゝでは一時預けなどに請取は出しませぬ。御不信用なら御斷りするこいはれて赤面したこいふ話を聞いたことがあるが、まあさういふやうな鹽梅。我が商店の飾り方は、前に言つた通り、開放主義は、西洋風でない、また支那風でもない、四方開放の家に住みつけた國風であらうが、こんな事もゆく〳〵は改めた方がよからう。ここに食物などは塵埃が勝手に宿るので、衛生の點からでも、西洋風の仕掛が良いこおもふ。パチルスが塵埃の中に交つてをるこすれば、東京の往來の店の物などは、こても食へないわけのものであるが習慣こいふものは大抵な理窟には勝つものこ見える。

賣子こいふものが、日々の商ひには大變關係を持つここは、料理店に於る給仕人のやうなものである。これは西洋は素よりだが、支那でもなか〳〵愛嬌の多い上手が、かゝへてある。殊に巴里などは目から鼻にぬけさうな利巧な奴がをる。言語不通でも、物を賣る事にすこしも蜘躊せず、ずん〳〵職業を盡してをるさまこいつたら頗るえらい。これらは人種にもよらうが、我が國人でも、すこしその道に教育したらごうだらう。佛頂面のそろひでは、いかに神國の品でも捌けにくいここが多いだらうこ思ふのです。

世界讀本 終

明治三十五年九月十五日印刷
明治三十五年九月二十日發行

世界讀本

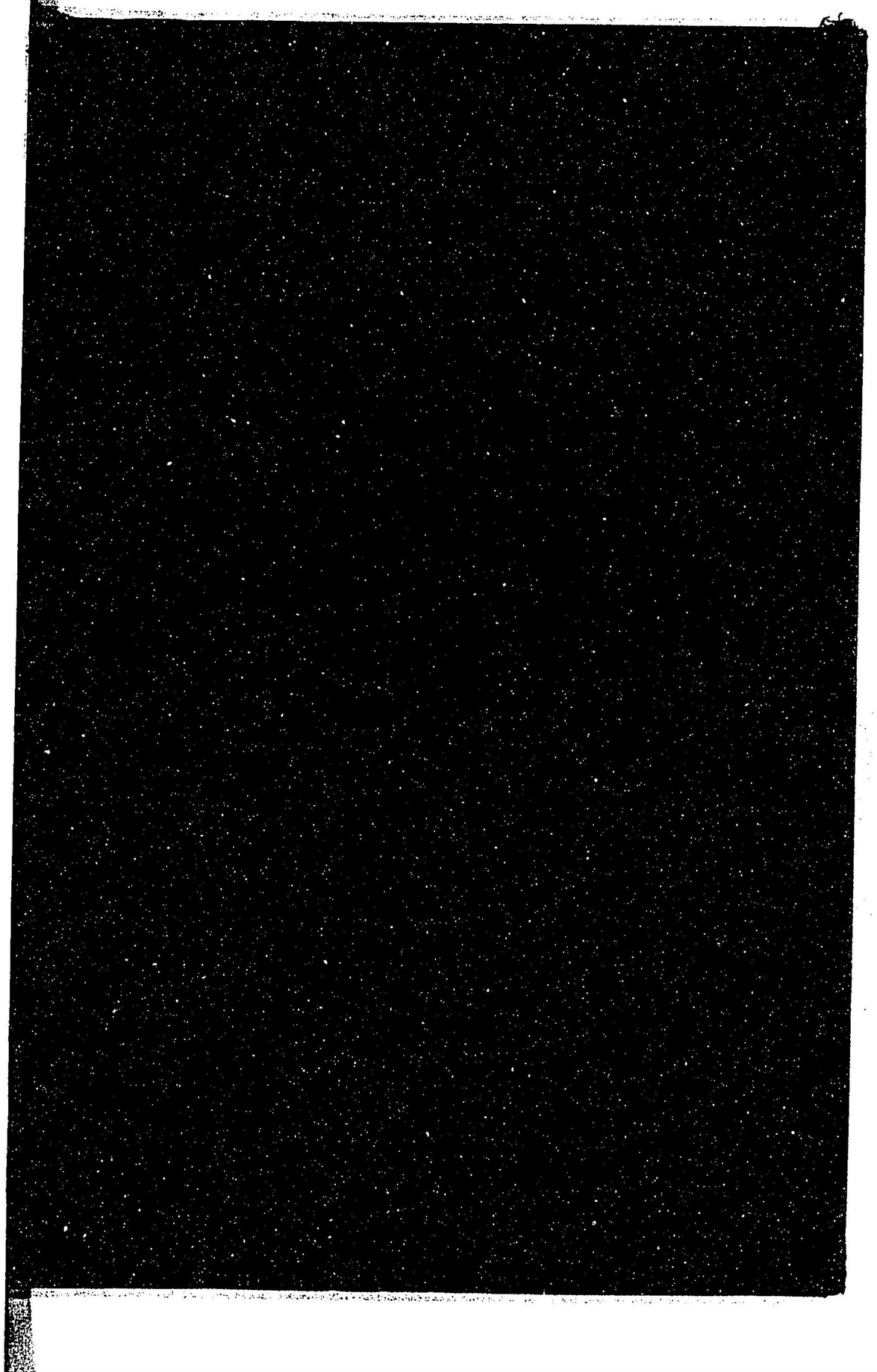
著者 池邊義象

發行兼印刷者 吉川半七
東京市京橋區南傳馬町壹丁目拾弐番地

印刷所 吉川印刷工場
東京市京橋區柳町五番地

發行所 弘文館
東京市京橋區南傳馬町一丁目

86
183



022076-000-3

86-183

世界読本

池辺　義象／著

M35

ADA-0421